

# 集団/共同奴隷耕作地—その実態及び歴史的役割—

沼 岡 努

2009年3月

新潟産業大学経済学部紀要 第36号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY  
FACULTY OF ECONOMICS

No. 36 March 2009

# 集団/共同奴隷耕作地—その実態及び歴史的役割—

沼 岡 努

はじめに

1. アンティベラム奴隷制プランテーションの性格  
—経営の合理化と集団/共同「耕作地」
  2. 集団/共同「耕作地」の歴史的役割
    - 1) 奴隷労働の二面性  
—プランテーション耕地労働と「耕作地」労働
    - 2) 集団/共同「耕作地」の形態
    - 3) 集団/共同「耕作地」の運営
- 結びにかえて

はじめに

この小論の対象は、合衆国南部奴隷制下に普遍的に見られたいわゆる「奴隷耕作地」（以下、「耕作地」）の一形態と位置付けられてしかるべき集団/共同「耕作地」にある<sup>1)</sup>。「耕作地」とは、奴隷主が奴隷に対して用益権を付与した土地のことであり<sup>2)</sup>、奴隷主は一般に「菜園」(garden)、「 Negro 耕作地」(negro patch) 等の呼称で呼んでいた。「耕作地」において奴隷たちは平日の夜間や週末の自由時間を利用し、野菜類や綿花、タバコといった商品作物を栽培したが、その片隅には豚、鶏など家畜・家禽類を飼育することも珍しくなかった。

こうした「耕作地」研究において、従来考察や議論の対象となってきたのは、各奴隷家屋に隣接して発達した家族用「耕作地」、及び年齢・性・奴隷主の特別な意図等により割り当てられた個人用「耕作地」であった。しかしながら、奴隷制史家ケネス・スタンプ (Kenneth M. Stampp) が画期的労作『あの奇妙な制度』(*The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*, 1956) の中で、「耕作地」には「各自自分の土地を耕作する場合と、集団で広い土地を耕作して収穫を分配する場合とがあった」と指摘したように、もう一つ別の形態、すなわち集団/共同「耕作地」が存在した。この「耕作地」形態に関しては、残念ながら今日に至るまで本格的研究はなされていない<sup>3)</sup>。

集団/共同「耕作地」がこれまで研究の外に置かれてきたことは、先行研究に見られる基本的問題視角と密接に関連している。「耕作地」の本格的研究は1980年代以降「奴隷経済」(the slaves' economy) 史家によって進められてきたが、彼らの一貫した主張は、奴隷主が「耕作地」活動に関与することはなかった、というものである。「奴隷経済」史家の多くは、奴隷主による「耕作地」付与は単なる「慣習的な」(customary) ものに過ぎず、奴隷は主人の影響を被ることなく自らの自由

意思に基づいて「耕作地」活動に従事し、作物を生産、売却したと主張する。そして、奴隷による「耕作地」活動の自律性、独立性を強調するのである<sup>4)</sup>。こうした捉え方は、奴隷制下に隷従を余儀なくされながらも、奴隷たちが自ら創出したコミュニティにおいて社会的・文化的自律性を享受した点を高く評価しようとした70年代奴隷制史家等の解釈を、あたかも理論を先行させ、単純に経済面にまで敷衍しようとしたものとも理解されかねない<sup>5)</sup>。実際、彼らの主たる関心は「耕作地」作物の収穫量やその売買取引高の規模に向けられ、結果として運営そのものに対する奴隷主の関わり方はほとんど等閑視されてきた。

以上のような先行研究の状況、問題点を踏まえ、従来奴隷制研究の外に放置され埋もれてきた集団/共同「耕作地」を掘り起こし、その実態及び歴史的役割を析出すること、それが小論の目的である。集団/共同の形態をとった「耕作地」が明確に確認できるのは、現研究段階では、プランター階級が利潤追求に高い関心を示し、農園経営の合理化を積極的に推し進め、奴隷の労務管理に細心の注意を傾けるようになったアンティベラム期である<sup>6)</sup>。従って、本稿では考察の範囲を南北戦争(1861-1865)以前のおよそ30年間、つまり経済体制としての奴隷制が以前にも増して強固となっていた時代とする。また、集団/共同「耕作地」を奴隷主が行った対奴隷労働政策の一環と位置付け、プランター自身が書き記した奴隷労働日誌、帳簿、アンティベラム期に多くの奴隷主が導入した「耕作地」実践報告が掲載されている農業誌や経済誌等を分析の主要な手掛かりとしたい。半面、「耕作地」の労働主体であった元奴隷による証言記録もその運営面を探る上で不可欠である。これら史料の精緻な読解を通して、以下、実証分析的考察を試みることにしたい。

## 1. アンティベラム奴隷制プランテーションの性格 —経営の合理化と集団/共同「耕作地」

19世紀に入ると、南部奴隷制の農園経営は以前よりも綿花、米、タバコ、さとうきび等の主要商品作物生産に傾斜していき、それに併せて野外耕作奴隷に対する労働管理体制もシステム化していった。この傾向はアンティベラム期にいっそう強まり、利潤の追求、極大化に余念のない企業家的・資本主義的プランターは商品作物生産の労働主体である耕作奴隷の労働編制法や労働効率性の絶えざるチェック、科学的農法の実践、さらには奴隷の労働意欲を刺激する観点から着手した衣食住改善運動など、様々な面から「プランテーション経営の合理化」(the rationalization of plantation management)、効率化を推し進めていった<sup>7)</sup>。結果、アンティベラム期のプランテーションは、支配者、隷従者が生活を共にする小さな社会的共同体でありながら、経営組織としては近代的労務管理体制を有する工場と何ら変りはなかった。

こうした合理的、効率的プランテーション経営にあって、日常労働レベルで対奴隷労働政策の中にしっかりと組み込まれていったのが耕作奴隷の集団—その全体ないしは一部—が耕作する集団/共同「耕作地」であった。本章では、集団/共同「耕作地」分析の導入的考察として、プランターが奴隷の日常生活の中に、またプランテーション経営の根幹を成す奴隷労働の中に浸透させていった合理的、効率的政策について具体的事例を見ることにしたい。集団/共同「耕作地」政策を生み出す背景として、アンティベラム期プランテーションの運営・労働管理的性格を理解しておくことが不可欠であると考えらるからである。

その一つは奴隷の食事を準備する「共同炊事場」(common kitchen)、つまり「炊事小屋」(cook house)の設置・活用である<sup>8)</sup>。70年代奴隷制社会史研究の多くは、奴隷家族が自分たちの小屋で夕食を共にする場面をよく描写し、家族的紐帯の強靱さを強調した。その叙述はややもすれば奴隷が三度の食事を家族単位でとっていたかのような印象を与えがちであった。確かに多くのプランターは、1日の労働を終えて小屋に戻った奴隷たちが家族で食事の支度をし、夕食をとることを認めた。これは奴隷側からの強い要望の結果でもあった<sup>9)</sup>。しかしその一方、疲労困憊の状態で携わる炊事が粗雑な調理、栄養の偏り等、健康に及ぼす害を憂慮し、専属の調理奴隷がつくる夕食を一さらに、しばしば朝食をも一炊事小屋で奴隷たち全員に食べさせるプランターも中にはいた<sup>10)</sup>。

朝食や夕食以上に共同炊事場での調理方式が一つのスタイルとしてはっきりと確立したのは、昼食の準備においてであった。多くのプランテーションではディナーである昼食の支度を料理専門奴隷たちに共同炊事場で当たらせ、食事を「じゃり隊」(trash gang)と呼ばれる子供奴隷等を使って畑まで運搬する方式が定着していった<sup>11)</sup>。耕作奴隷は普通、奴隷居住区から遠く離れた畑で働くことが多かったため、昼食時に彼らを奴隷小屋へ帰らせて自炊させたり、共同の炊事小屋で食べさせることはプランターにとって得策ではなかった。労働時間の短縮を余儀なくされるからである。また、専属の料理奴隷が時間をかけてつくる食事の方が栄養バランスの観点からも好ましく、奴隷の労働意欲を刺激するともプランターは考えた<sup>12)</sup>。そのため、共同炊事場の円滑な運営を重視するプランターが多かった。中にはアラバマ州の綿花プランター、チャールズ・クロメルン(Charles Crommelin)のように入念な監視体制を採るプランターもいた。彼は奴隷監督への指図書に、「耕作者たちの食事の用意を料理人が適切な方法で適切な時間に行うか注意せよ」と明記したのである<sup>13)</sup>。

共同炊事方式が奴隷制プランテーションの展開と緊密な関係のうちに醸成されていった地域の一つにテキサス州を挙げることができる。同地域にプランターが入植したのは、ようやく19世紀に入ってからのものであった。しかし、その後まもなく共同炊事方式が導入されていった。それは、例えば1821年に入植した最初の綿花プランターの一人ジャリド・グロウス(Jared Ellison Groce)の実践に見出すことができる。彼は、夜明けとともに奴隷たちに共同大食堂で目覚しのコーヒーを1杯飲ませた後、畑へと駆り出した。そして2、3時間の労働後に朝食を、正午には昼食をそれぞれ畑でとらせ、夕食は日没の18時前後に全員を大食堂に集めて与えた<sup>14)</sup>。これがテキサスの典型であったとは断定できないが、「調理していない食物をニグロに渡し、彼らにつくらせるやり方」はもはや1850年代中頃には一般的ではなくなっていた。三十数年の間に共同炊事方式はテキサスの地にしっかりと根を下ろしていったのである。

奴隷主のこうした策は奴隷側の認識するところでもあった。ミシシッピ州のある奴隷は、それを「時間の節約と混雑防止」と受け止めた<sup>15)</sup>。プランターの政策的意図を奴隷側も明確に認識していた証拠である。ちなみに、混雑というのは昼食時に畑から戻って来た奴隷たちが炊事小屋に溢れ返る状況を指し、奴隷主がしばしば目撃する光景であった。こうして共同炊事場で食事をつくり、畑へ運び、それを耕作奴隷に畑周辺の木陰あるいは雨よけ用の小屋(shelters)で食べさせる方式がプランテーション経営システムの中に組み込まれていったのである<sup>16)</sup>。

さて、次にプランターが奴隷のプランテーション労働の一環として、と同時に彼らの日常生活の家事労働として慣習化させていった合理的、効率的運営の例として、燃料材の確保・備蓄体制を見てみよう。燃料材、つまり薪は、当時白人家族のみならず黒人奴隷にとっても調理用、暖房用とし



て不可欠であった。そこで、衣類の洗濯などと同様、薪の確保を奴隷たちに任せていた小規模農園を別とすれば、ある程度規模が大きく労働分業体制を敷いていたプランテーションでは、木材の切り出しや薪の備蓄作業—それは、需要が増大する冬季間に備え、通常秋の収穫後に行われる習慣であった—はプランテーション労働の中に組み込まれていた。その理由の一つは、樹木の伐採が未開墾地の耕地化という重要なプランテーション耕地拡大策と重なっていたからであり、また、過酷な終日耕作労働後、さらに木材牽引作業を強制するのはあまりに「非人間的」とであると奴隷主側が判断したことに因るものでもあった<sup>17)</sup>。

「伐採班」(wood gang) が切出・運搬してきた木材は、適当な長さに切られ、「燃料材置場」(wood lot/ wood patch/ wood yard) と称される空間に山積みされた。大規模プランテーションではそれは屋敷用の薪の山と奴隷用の巨大な山に分けて置かれたが、奴隷たちの目には「貯木場さながらの光景」に映った。プランターの中には粗末な作りではあったが、「燃料材小屋」(woodshed/ wood house) を建てる者たちもいた<sup>18)</sup>。

こうして確保した薪は奴隷たちに配給された。不足した際には燃料材置場へ行き、自由に薪を持ってくることを許可するプランターも多かった。さらに、プランター所有の林や森、あるいは近隣の開放地—当時、フェンスで囲っていないプランテーションの未開墾地、その周辺部の森、沼沢地、川等はコミュニティの誰に対しても開放され、利用することが出来る「共同地」(the commons) であった—から採ってくることも許可するなど、現実のプランターの対応はかなり柔軟であった<sup>19)</sup>。

このように配給制を採りながらも、補完的に燃料材置場を共同利用の下に管理していった点は、奴隷主による野菜供給システムとの類似性を想起させる。すなわち、奴隷は屋敷裏の「奴隷主菜園」(master's garden) やプランテーション耕地の一角に設けた菜園・野菜畑から野菜類を支給されたが、更に必要な際にはこれらの畑を比較的自由に利用することができた<sup>20)</sup>。加えて、彼らは小屋に隣接する自家菜園(slave garden) で生産した余剰野菜を大抵売却することが許されたが、この点、燃料材の場合も同様であった。奴隷は平日労働後ないしは週末、近隣開放地を薪炭採取・生産地として利用し、手に入れた薪や炭を自家消費することももちろん、「売却する」ことも許された。活動を奨励されるケースも珍しくなかった<sup>21)</sup>。それは、プランターが支給体制を確立しながらも、方針として自給体制化を意図していたからであろう。奴隷たちに「常時、薪を自分の小屋近くに積み上げておこう」指示するプランターが多かったことがそのことを物語っている<sup>22)</sup>。

奴隷制下での生活を振り返り、「食べ物には豊富だったし、着る物にも困らなかったし、燃やす木も豊富にあった」とサウス・カロライナの元奴隷がいみじくも回顧しているように、燃料材は奴隷生活の中で衣食とほとんど同列に位置付けられ、重要な役割を果たしていた<sup>23)</sup>。燃料材の供給をプランターは奴隷個々人の家事労働として突き放すのではなく、プランテーション労働の中に組み入れ、共同作業として能率的、効率的に遂行した。それはまた、未開墾地の耕地化というプランテーション拡大策とも連動する合理的政策であり、さらに燃料材置場の共同利用、近隣開放地における薪炭生産・売却活動といったささやかな奴隷経済活動をも許容し、労働意欲の向上を狙う統合的プランテーション政策の一環なのであった。

最後の例は、あらゆる実践的な奴隷労働政策の原点となった労働能力の格付け及び労働編制法—いわゆる集団制(gang system)と課業制(task system)—である。プランテーション経営の合理化は、プランターにとっては当然奴隷の効率的使役という昔からの大きな問題の克服を意味した。こ



テーションを巡り、鋭い洞察力によって名声を得ていたニューヨーク州の一農民フレデリック・オームステッド (Frederick Olmsted) は、自ら観察した労働編制について述べている。「幾つかの集団が働いているところを目撃したが、ある集団は全員が男で、排水溝掘りをしていた。別の集団は女ばかりであった。さらに別の集団は男女の子供ばかりで、鋤を使って旧とうもろこし畑で『畝立て作業』 (listing) をしていた。こうした者たちは全て課業制で、[集団毎に] ニグロのドライヴァの監視下で働いていた。」このドライヴァの仕事に注目したオームステッドは、さらに両制度の関係を次のように記している。「どんな畑労働でも集団で取りかかろうとする場合、彼らを監督することになるドライヴァは事前にタスクを測定し、杭を打って区画しておかなければならないのだ。…その集団が畑にやってくると、ドライヴァは一人ひとりのその日のタスクを指示するのだ。」<sup>26)</sup> このような耕作奴隷の労働能力等級化、労働効率性・生産性向上の追求から生まれた集団制と課業制の融合・統合化がアンティベラム期プランテーション奴隷労働システムの基本を成したのである。

以上、アンティベラム期プランテーション経営を特徴づけた合理化・効率化の観点から、プランターが奴隷の生活や労働の中に定着させていった政策の一端を具体的事例を引いて見た。これらは集団/共同「耕作地」政策創出の背景を成し、合理的経営という理念によって統合されていた。「耕作地」活動に主人の影響力を認めず、個人用、家族用「耕作地」のみ対象としてきた従来の「耕作地」研究では捉え切れなかった集団/共同「耕作地」活動は、利潤追求に意欲を燃やし、プランテーション経営の合理化を積極的に推し進めたプランターの対奴隷労働管理に注目することで初めてその輪郭が浮かび上がってくるのである。

## 2. 集団/共同「耕作地」の歴史的役割

「はじめに」でも触れたように、従来「耕作地」研究において議論の対象となってきたのは、各奴隷家屋に隣接していた「菜園」と一般に呼ばれる家族用「耕作地」と、奴隷主が個々の奴隷に割り当てた農場周縁部の個人用「耕作地」であった。しかしながら、これら2形態以外にも「耕作地」は存在した。それは奴隷が集団で広い土地を耕作し、収穫を分配するもので、集団/共同「耕作地」と呼べるものである。その存在は一部の史家により指摘されてはきたものの、本格的研究は未だ皆無であり、プランター、奴隷双方にとっての意味やプランテーション経営における位置付けといった問題が検討の俎上に載ったためしはこれまでにない<sup>27)</sup>。以下、形態、機能の分析を通して捉えられる集団/共同「耕作地」の実態、及びそれがプランテーション経営の中で果たした役割について見てゆきたい。

### 1) 奴隷労働の二面性—プランテーション耕地労働と「耕作地」労働

独立革命期にノース・カロライナを訪れたジャネット・ショウ (Janet Schaw) は、日誌の中で奴隷の食生活に触れ、「ニグロに与えられているのは、1日1クォートのトウモロコシと一区画の耕地なのですが、彼らはその土地を主人などより遥かに上手に耕作しているのです」と、奴隷主畑、奴隷畑両耕地間の労働の質的差異を明快に指摘した。奴隷たちのこうした労働態度・意欲の翻然は、アンティベラム期に入っても何ら変ることなく、時にはそれが成果の数字に表れることもあった。メリーランド州のプランター組織機関誌『アメリカン・ファーマー』 (American Farmer) の1846

年4月号は、奴隷小屋に隣接する『サム爺さんの』土地や『ポンペイの』土地の方が『旦那の』耕地よりもエーカー当り遥かに多いトウモロコシ、綿花を産している」ことを周知の事実として報じている。また、1860年の『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』(*New York Herald Tribune*)紙は、アラバマのある奴隷監督の言を引用し、「今年取れたニグロの綿花31バールを市場へ持って行ったが、我々プランテーションの綿花よりも高値が付いたのだ。彼らの綿花は[1ポンド当り]10.5セントの値が付いたのに、我々の方は10セントにしかならなかった」と、経営者側の驚きと軽い落胆ぶりを紹介している<sup>28)</sup>。

奴隷が自身の「耕作地」労働で見せるまるで疲れを知らないかのような精力的労働を、当時多くのプランターは認識していた。そして、彼らは同様の労働態度をプランテーション耕地においても当然期待した。サウス・カロライナの米作プランター、ダンカン・ヘイワード(Duncan Clinch Heyward)が戦後間もない解放民(freedpeople)の労働態度に接した際に思わず吐露した言葉は、戦前、奴隷制時代に企業家的・資本主義的プランターが奴隷労働に対してまさに抱いた感情そのものであったに相違ない。ヘイワードは、解放民が収穫した自身の稲を解放民居住区で脱穀している光景を馬車で通りすがりに目撃した時、プランテーション耕地でも「同じように一生懸命働いてくれれば」と、願わずにはいられないのであった<sup>29)</sup>。

奴隷主、奴隷双方の耕地間に見られた労働の質的格差という古くから奴隷主を悩ませていた問題は、このようにアンティベラム期の奴隷所有者、とりわけ利潤極大化を目指したプランターたちが乗り越えなければならない大きな課題であった。この労働の質的格差を解消させるべく、プランターが創意と試行錯誤を重ねながら実践していったのが集団/共同「耕作地」であった。それは、時間的にも空間的にも家族用、個人用「耕作地」とは全く形態を異にするものであった<sup>30)</sup>。

## 2) 集団/共同「耕作地」の形態

集団/共同「耕作地」は、奴隷主が耕作奴隷集団の全体ないしは一部に対して割り当てた土地であった。その最大の特徴は、「耕作地」をプランテーション耕地内に組み入れ、その活動を平日昼間のプランテーション耕地労働の時間帯に、しかも多くの場合その労働の一環として行った点にある。このことを実態に即して換言すれば、集団/共同「耕作地」は、(1) 奴隷主が影響力を持ち、管理・運営するものであったこと、(2) プランテーション耕地内に設置され、市場向け商品作物畑及び自家消費作物畑と併存していること、また、そこでの労働は(3) 奴隷主のための昼間労働時間帯に奴隷主のための労働と併行して行われたこと、と言えよう。こうすることで、プランターはプランテーション耕地での奴隷の労働意欲を高める方向で、両耕地間における労働の質的格差を解消していこうと図ったのである。実際の運営に関わる詳細な考察は後に譲るとして、ここでは上の3点に注目しつつ、集団/共同「耕作地」の形態を見ていくことにする。

多くのプランテーションでは、通常広大な耕地を40エーカー前後一奴隷監督あるいはドライヴァーが一人で監督し得る最大可視範囲一の畑に細分化し、畑単位で商品作物等を栽培していた。このことから、奴隷主が集団/共同「耕作地」を耕作奴隷集団に割り当てる場合、40エーカーが一つの目安となった。しかし、実際にはプランテーション規模一より直接的には総奴隷中に占める耕作奴隷の割合一や奴隷主が土地割当の対象として選定する特定奴隷集団の規模により、あるいはまた奴隷主の特別な政策的意図によりかなりの幅が見られた。

管理しやすいように更に半分の20エーカーに分割した例を始め、トウモロコシ、豆類を生産していた37エーカーの畑の一角、7エーカーを集団/共同「耕作地」に充て、サツマイモの栽培を許可した例、また、割当面積は定かではないが、2名から数名の奴隷が共同運営する小規模な例なども確認される。フロリダの綿花プランター、ロバート・ギャンブル (Robert Gamble) は3名の奴隷が「集団で栽培した」トウモロコシ10ブッシェルと綿花1,180ポンドに対して合計17.95ドルを支払ったし、ミシシッピ州の綿花プランター、ウィリアム・アーチャー (William S. Archer) 経営のキロナ・プランテーション日誌には奴隷2名によるトウモロコシの共同栽培が習慣化されているかのようにな例も載っている。一方、大規模な例として、プランテーションを数箇所所有していたミシシッピ州のナット・ハラー (Nutt Haller) は、その一つルイジアナ州の綿花プランテーションで「約120エーカー」もの集団/共同「耕作地」を奴隷たちに割り当てたのであった<sup>31)</sup>。

「耕作地」を割り当てる際、個々の奴隷の能力や意欲を重視する方式も採られた。例えば、年齢と性を基準に「男たち [全体] に2エーカー、女たち [全体] には1エーカー、子供たち [全体] には半エーカー」の「ニグロ集団耕地」(negroes' field) を与えたアラバマ州の小プランターのやり方は一見機械的にも見えるが、奴隷主の経験に基づいた労働能力査定から生まれた方式だったと考えられる。また、労働意欲を植え付ける観点から、一種刺激策として「能力と意欲ある個々人に対して実に多くの畝を与え」、協業方式でトウモロコシを栽培することを許可したルイジアナのプランテーションもあった。こうした奴隷の能力を最大限引出すことを実験的に試みたのがジョージアの米作プランター、ジェームズ・クーパーであった。彼は精励恪勤な21名の男子奴隷を選び出し、報奨の形で50エーカーの耕地を与えたのである<sup>32)</sup>。

集団/共同「耕作地」を奴隷たちに割り当てた奴隷主は、それが奴隷たちの畑であることを明らかにするために、「ニグロ畑」(Negro Patch)、「黒ん坊畑」(Nigger field)、「ニグロの土地」(Negro ground)、あるいは「ニグロ集団耕地」(negroes' field) といった名称を付け、労働日誌、覚書、帳簿等へ書き記した。一見当たり前のように受け止められるこうした命名は、実は次のことを含意していた。すなわち、たとえ形式的、暫定的にしろ、奴隷主は自身の権限において当該「耕作地」の用益権を奴隷たちに明確に容認したということである。これとの比較において、一言補足しておきたい。それは、1840年代以降徐々に浸透していったプランテーション耕地内の菜園・野菜畑に関してである。これは実質上全奴隷用畑であり、「その菜園からは毎日野菜を採ることを許されていた」という元奴隷たちの証言を見つけることは難しくはない。だが、「耕作地」とは異なり、奴隷主、奴隷双方がその畑を「奴隷主の所有」と認識していたので、集団/共同「耕作地」と呼ぶには少々無理がある<sup>33)</sup>。

では、このような集団/共同「耕作地」で奴隷たちは何を栽培したのだろうか。最も典型的だったのはトウモロコシである。トウモロコシは奴隷にとっては自家消費用として必要不可欠であり、また換金作物としても価値があった。収穫されたトウモロコシは奴隷間で分けられたが、彼らは受け取った一部を自家消費用とし、余剰分を大抵主人に売却した。

トウモロコシが集団/共同「耕作地」作物としてよく栽培された理由は、主に奴隷主側の要求によるものであった。第1に、それは綿花、タバコ等商品作物の盗難防止からであった。商品作物以外の作物栽培を認めることで、プランテーション作物の窃取を防止しようとしたのである。第2には、作物そのものの性質からである。トウモロコシは作付けから収穫までに要する総労働時間が1

エーカー当り69時間と、綿花135時間の約半分で済んだ。また、奴隷一人当り栽培可能面積の上限が綿花8エーカーに対し、トウモロコシは20～30エーカーであった。従って、奴隷主は綿花栽培に比べてかなりの労働力の削減を達成でき、その分プランテーション耕地労働力を犠牲にせずに済んだのである。第3の理由として、トウモロコシは奴隷の主穀であり、配給食糧の補完的役割を果たすことができるからであった。これは奴隷主、奴隷双方にとって利点となった<sup>34)</sup>。

手入れが簡単で生育の良い落花生も比較的よく栽培される傾向にあった。サウス・カロライナ州のジェームズ・ハモンド (James H. Hammond) は、集団/共同「耕作地」に「落花生を植えさせ、収穫を奴隷たちの間で公平に分け合う」よう指図したが、この運営方式は次男のエドワード (Edward Spann Hammond) へと継承された。集団/共同「耕作地」における綿作の期待外れな結果から、落花生栽培へと転作したのは、アラバマの綿花プランター、ヒュー・デイヴィス (Hugh Davis) であった<sup>35)</sup>。このように、集約農法を要しない落花生、また綿花に比べて労働投入率の低いトウモロコシはプランテーション労働に対する影響が小さかったので、奴隷主も経験的に集団/共同「耕作地」作物として偏重したと考えられる。

とは言え、窃取の危険性を認識しながらも、奴隷のより高い労働意欲を引き出し、それをプランテーション耕地労働に転化させたいという強い思いから、奴隷主の中には最も市場価値の高い綿花栽培を容認する者もいた。1815年頃テネシーからアラバマに移住してきたアラバマ初期開拓移民の一人である綿花プランター、ウィリアムスン・ホーキンス (Williamson Hawkins) は、毎年耕地利用の策定期間になると、トウモロコシ、小麦など穀類用畑地を先に決め、次いで耕地中「最も条件の良い50エーカーの土地を奴隷たちの利益専用の綿花に割り当てる」ことにしていた。また、綿作を認める奴隷主の中には自分の産する白色綿とは異なる品種の淡黄色綿 (nankeen cotton) のみを許可する者もいた。一方、タバコは奴隷たちの嗜好品で、配給制を導入する農園も珍しくなかったが、むしろ一般的だったのは、タバコ専用畑を奴隷たちに割り当て、彼らがそこで協働し、生産したタバコを納屋で乾燥させ、「欲しい時には誰でもそこへ行き、手に入れることのできる」システムであった。この場合、奴隷主はプランテーション耕地の隅のフェンス沿いの土地を宛がい、耕作上自身のタバコと空間的に明瞭に区別できるようにするなど、細心の注意を払った<sup>36)</sup>。

さて、以上のような集団/共同「耕作地」において、奴隷はいかなる労働編制の下に置かれたのだろうか。実際の労働活動の分析は次節に譲るとして、ここでは集団/共同「耕作地」における労働編制形態を大枠で捉えておきたい。そのためには、時間的、空間的に集団/共同「耕作地」を取り込んだプランテーション耕地の労働編制と併せて見ていく必要がある。それが労働の基本的枠組みを与えたからである。結論的に言えば、前述の集団制と課業制の融合・統合化、これが原則的であった。耕作奴隷は労働能力によって等級付けられ、それをもとにギャングと呼ばれる通常20名以下の集団ないしは組に分けられた。各集団には監督者としてドライヴァあるいは白人奴隷監督がつき、奴隷一人ひとりに1日のタスクを課した。この編制方式は、労働現場を視察したオームステッドによれば、「綿作、米作にかかわらず」実施されたという<sup>37)</sup>。そして、この編制が集団/共同「耕作地」においても採用されたのである。以下、具体的に見ていこう。

一事例として、「ニグロ耕地」 (negro field) という名称の120エーカーもの広大な集団/共同「耕作地」を奴隷に与えた一労働日誌中に「もっとも、これは彼ら [奴隷たち] のものなのだが」 (altho' theirs) と記されている点から「耕作地」であることが分かる—エラビ・プランテーションの労働編

制を見てみよう。経営者ナット・ハラーの日誌には、白人奴隷監督と奴隷ドライヴァが概ね4～16名の奴隷を1集団として統率・監督した様子が具体的に記されている。春の本格的な耕作シーズンを前にした綿花用耕地整備・苗床造りに言及している箇所から拾ってみよう。

1844年2月16日金曜日、「11名が昨日同様、鋤耕作、4名は昨年のトウモロコシ畑を鋤耕作。綿花畑の耕作開始。[ドライヴァの]フレデリック隊はニグロ耕地の[綿花]耕作準備として畑清掃」、21日水曜日、「フレデリック隊はフェンスの修理、15名がニグロ耕地で鋤耕作」、翌22日木曜日、「13名がニグロ耕地の鋤耕作を終了、引き続きブリックヤード畑で鋤耕作を開始。—[奴隷監督の]ヘンリー・ドラッグ、女奴隷13名に排水溝作業をさせる。ビル、男奴隷10名とニグロ耕地で樹木の伐採、運搬作業」とある。更に3月に入ると、14日木曜日には「16名がニグロ耕地内の未開墾地で鋤を使って土塊を碎き、耕作作業を開始」、翌15日金曜日にも10名がニグロ耕地で前日同様、土塊を碎き耕している。18日月曜日には「4名が10時頃ニグロ耕地で綿花の作付け作業を終了」させた。こうした一連の描写から、「ニグロ耕地」労働がプランテーション耕地労働に組み込まれ、平日の昼間、交替制で行われた点は明白である。しかも、「ニグロ耕地」での労働編制規模は綿花作付け時の4名を始め、10～15名前後の耕作作業と比較的小規模である。また、「女奴隷たちは午前中、バミューダ芝草の植え付け、午後はニグロ耕地でソダ拾い」とあるように、女性だけの編制も見られる。一方、個々の奴隷に対するタスクの割当は、次のような耕作作業以外の労働に表れている。奴隷監督「ヘンダーソンのもと、チャールズ、ジョシュアは古い荷車を修理、フランクは鍛冶作業小屋で労働。」また、作業内容には触れていないが、監督が特定奴隷をある仕事に従事させたことを示唆する表現、すなわち「ヘンダーソン、[奴隷の]チャールズとジョシュアを率いて」、「[奴隷監督の]リード、フランクを連れて」といった記述も散見される(第1表)<sup>39)</sup>。次に、きわめて小規模な労働編制、個々人へのタスク労働割当に近い状態が「ニグロ耕地」において現出した例を見てみよう。

ノース・カロライナ州東部低湿地帯でトウモロコシの商業的生産を展開していたジョサイア・コリンズ3世(Josiah Collins III)は、プランテーション耕地を約30もの畑に細分化し、ハラー同様、小集団単位で労働に当たらせていた。彼のプランテーションには55エーカーの集団/共同「耕作地」があった。それは「ニグロ耕地」(Negro Patch)と命名されたが、1838年にコリンズ自身、予想外に高い生産性に驚愕し、「ニグロ耕地——1エーカー当り収穫高約4バレル!!!!」(Negro Patch —— Yield pr. Acre nearly 4 Bbls. !!!!)と思わず『覚書』(Memorandum Book)に記したのであった<sup>39)</sup>。

この「ニグロ耕地」の労働形態を知る最良の手掛りは、『プランテーション労働日誌——1850-1853年』(Plantation Record from 1850 to 1853)にある。プランテーション、ニグロ両耕地の日々の労働内容が克明に記されている。例えば、1850年6月19日水曜日、「午前8時まで9名がローア・ライス畑で鋤耕作。2名が12時までニグロ耕地で機械による小麦収穫作業に従事」、1850年11月21日木曜日、「[午前]10時まで畑奴隷全員によるトウモロコシの運搬及び脱穀作業。これ以降、24名はニグロ耕地、アダム・カット耕地、ノース・バウンダリー耕地の排水溝清掃。」1851年4月16日水曜日、「3名の鋤耕作奴隷が何名かの耕作奴隷と共に畑Gでトウモロコシの作付け作業。ニグロ耕地で1名、ノース・バウンダリー畑で8名、インディアン・タウン畑で5名がそれぞれ鋤耕作」、同年5月21日水曜日、「12名でレイク・サイド畑、74エーカー畑を12時まで鋤耕作、その内6名が引き続き畑Eに移動。1名がニグロ耕地の鋤耕作、3名がインディアン・タウン畑で鋤耕作。残りの耕作奴隷たちは83エーカー畑、ニグロ耕地、アダム・カット畑、ノース・バウンダリー畑でトウモロコシの植替

え作業」(第1表)<sup>40)</sup>。エラビ・プランテーション同様、「ニグロ耕地」が時間、空間的にプランテーション耕地労働スケジュールにしっかり組み込まれていたことが判る。

プランテーション耕地における編制規模はトウモロコシを商品作物としていたこともあり、明らかに小さいが、「ニグロ耕地」に至っては鋤手が1名で耕作する日も珍しくない。同じ55エーカーのアダム・カット、ノース・バウンダリー各耕地に対する労働力投入との差は明白である。フィリップ・モーガン(Philip D. Morgan)の言う「監視が比較的解かれた状態」で半自律的、自己規制の集団となっている労働編制状態にきわめて近い状況が現出していたと理解される<sup>41)</sup>。

以上のことから明らかなように、集団/共同「耕作地」は面積的には40エーカーが一つの目安となっていたが、個々のプランテーション規模やプランターの政策的意図によりかなりの差が見られた。これらの土地は奴隷の用益権が認められ、「ニグロ集団耕地」といった名称が一般に付けられた。ここで彼らはトウモロコシ、落花生、時にはプランテーション商品作物である綿花やタバコを栽培したが、そこでの労働はプランテーション耕地労働に組み込まれる形で、平日の昼間労働時間帯にプランテーション商品作物の畑労働と同時併行的ないしは連続的に行われた。労働編制規模は、大体15名を超えない集団を1労働編制—奴隷一人当たり栽培可能面積が綿花の約3倍のトウモロコシ栽培の場合、労働編制はより小規模であったが—とし、ある畑での作業が終了すると次の畑へと移動する方式が採用された。これを「耕作地」側から見れば耕作者の交替制に他ならない。アラバマのある小規模プランターは、プランテーション労働スケジュールに沿った交替制をいみじくも次のように表現している。「私は『ニグロ集団耕地』(negroes' field)と呼んでいる畑地を持っていて、自分の畑と同じように、その畑でも順番に(in it's turn)働かせています。」<sup>42)</sup>

### 3) 集団/共同「耕作地」の運営

前節では、土地空間的にも労働時間的にも集団/共同「耕作地」がプランテーション耕地に組み込まれていた点を考察した。それは、奴隷経済史家等が従来強調してきた奴隷主権力の及ばない「耕作地」とは著しく異なる形態であった。そこで、本節では集団/共同「耕作地」の運営そのものに迫ってみたい。

集団/共同「耕作地」の存在、形態が奴隷主のプランテーション労働政策と深く結び付いていたことは、これまでの考察から明らかであろう。そして、当然奴隷主のこの政策的意図は、集団/共同「耕作地」の運営そのものにも大きな影響を与えた。なぜならば、集団/共同「耕作地」は奴隷主が大別次の3種類のいずれかの方法を採用することで、その後の運営が方向付けられたからである。

(1) 運営の一切を奴隷たちに任せる形、つまり奴隷自身による共同運営方式、(2) 奴隷たちに一定面積の割当地を与え、それをプランテーション耕地と共に昼間耕地労働スケジュールに組み入れて運営していく方式、(3) 割当地を特定奴隷集団に与えるが、その際、一定の尺度—例えば、年齢、性、労働能力など—に基づき、個人毎に割当面積を定めておく方式。ただし、労働は個人単位ではなく集団で一実際には交替制で一行う方式などである。以下、各々について見ていくことにする。

最初の自主的共同運営方式の実践例はわずかしは見当たらない。それは、奴隷主自身この方式の問題点を認識したからに相違ない。ジョージア州の米作プランター、ジェームズ・クーパーは様々な刺激・誘因策を労働管理政策の中に積極的に採り入れた進歩的・資本家的経営者として知られて



いた。ある時、彼は次のような「共同耕作地」(common field)の実験を行った。労働意欲に燃えた模範的男子奴隷21名を選び、50エーカーの集団/共同「耕作地」を与えたのである。活動が許されたのは、土曜の午後と労働から解放される平日の自由時間帯であった。1年目はクーパーの管理下で「1,500ドルの純益」を上げ、彼は労働意欲を一層鼓舞しようと、奴隷たちに「銀貨で支払う」配慮を示した。しかし、翌年彼らに運営を任せると、収穫は半減、3年目には土地は荒地と化してしまった。この実験が失敗した原因について、1840年代にアメリカ南部各地を回ったイギリスの科学者チャールズ・ライエル(Charles Lyell)は、「耕作地を黒人たちの共有にしたこと」(their holding the property in common)としている。また、50年代中頃に南部を旅したアメリア・マーレイ(Amelia M. Murray)はクーパーから直接この実験のことを聞き、働き手を「適切な監督下に置く」ことが重要なのである、と自著の中で指摘している<sup>43)</sup>。

土地の共有に起因する集団奴隷個々人の責任性の希薄化、労働意欲の減退は、アラバマのヒュー・デヴィスが痛感したことでもあった。彼はプランテーション耕地中の畑一つを耕作奴隷用の綿花畑とし、彼らの「仕事ぶり、態度、既婚か未婚」等の尺度により収穫を分配しようとした。その畑は「私の時間帯[プランテーション労働時間帯]に全員で共同耕作すること(to be worked by all in common)」になっていた。だが、奴隷たちの関心は低く、畑中の除草作業もはかどらず、結果、12月の収穫は当初の「期待よりもはるかに少ない」量に終わった<sup>44)</sup>。

奴隷集団に広い耕地を与え、共同運営を一任するやり方は、限られた事例の範囲で言えば、機能したとは言い難い。しかし、このことから直ちに集団/共同「耕作地」に実効性はなかったとか、収益性に乏しかったという結論には至らない<sup>45)</sup>。奴隷主、とりわけ利潤極大化を第一目標としたプランター階級の中には、より積極的に自身が関与する形の集団/共同「耕作地」政策を展開した者たちがいたからである。それは、基本的にはプランテーション昼間耕地労働に編入させる形での集団/共同「耕作地」であった。以下、この点についてプランター自身が書き綴った奴隷労働日誌、帳簿を手掛かりに見ていきたい。

サウス・カロライナ州の綿花プランター、H. G. チャールズ(H. G. Charles)は、日々の奴隷労働を記録した『プランテーション記録—1860-1911年』(*Plantation Records, 1860-1911*)の中にわずか2頁ではあるが、集団/共同「耕作地」を考察する上で示唆に富んだ記述を残している。それは、1860年11月末から12月半ばにかけて行われた綿花摘み取り作業に関するものである。11月末に2日間行ったプランテーション耕地の綿花摘み取り作業は降り出した雨により中断、12月10日に再開され、3日間行われた。この計5日間に摘み取った綿花は個人毎に収穫量が記載されている。ところが、次の2日間に関しては該当欄にただ「ニグロ綿摘み取り」(picking the Negro[e]s cotton)と大きく横書きされているだけである(第2図)<sup>46)</sup>。作業中断期間の記述から推察するに、天候急変、足場の悪さ等により奴隷たちを急遽豆類、トウモロコシ、サツマイモ等の収穫作業へと振り向け、奴隷の効率的使役を実践したチャールズの臨機応変な対応ぶりが窺える。そうした仕事内容を記載しておきながら、ニグロ個々人の摘み取り高を書き忘れたとは考えにくい<sup>47)</sup>。このような事情を勘案すれば、チャールズの記した「ニグロ綿摘み取り」とは、集団/共同「耕作地」での作業を指している可能性がきわめて高い。

集団/共同「耕作地」の規模、及びプランターによるその位置付けや集団労働の性格がより明確に描き出されている事例の一つ取り上げてみよう。ノース・カロライナ州東部の綿花プランター、ス

第2図 H.G.チャールズ・プランテーション記録に窺える  
集団/共同奴隷耕作地におけるニグロ綿摘取り作業

Pilley	35	sick	✓	35
Boston	46	20	✓	154
Phillis	29	43	✓	72
andrew	37	33	✓	70
scalley	15	35	✓	50
1860 Mulberry tree cut				1472
December 10				
Swatte	35	30	✓	65
Frederick	sick	59	✓	39
Candis	59	65	✓	167
Chas	57	67	✓	160
Wong	58	27	✓	118
Manerwa	77	74	✓	201
Caroline	74	73	✓	190
Henry	74	73	✓	20
Cor-Torn	62	70	✓	172
India				
Harvey				
Stoner				
Pilley	53	27	✓	125
Boston	44	37	✓	114
Phillis	57	46	✓	136
andrew	22	22		22
scalley				
Total Mulberry Cut				1715
5885				
4845				
2368				
1873				
1472				
1032				
660 1/2 per ano				

出典: "Mulberry Tree Cut," Plantation Records, 1860-1911, Charles and Company, South Caroliniana Library, University of South Carolina, Columbia.

ティーヴン・ノーフリート (Stephen A. Norfleet) は、南北戦争時に150名の奴隷を所有、その内耕作奴隷は60~70名程度であった。彼は「ストッキング・スラッシュ」(Stocking Slash) というプランテーション耕地周縁部の樹木の茂った未開墾地30エーカーを耕作奴隷集団に割り当てた。彼の帳簿には奴隷たちの収穫したトウモロコシや家畜飼料用トウモロコシの外皮、茎等を彼らから購入したことが記されている。1845年11月、「ニグロたちからトウモロコシ、飼料 (fodder) を購入——125.30ドル」、1856年12月、「ニグロたちへのトウモロコシ等代金支払い——140ドル」、1858年12月、「ニグロたちからトウモロコシ、飼料等購入代金——70ドル」などである<sup>48)</sup>。これが奴隷集団全体への支払いであることは、トウモロコシの収穫、換金化が個人単位で行われていたプランテーション例と比較すれば、その額からして明らかである (第3図)<sup>49)</sup>。このように、集団/共同「耕作地」生産物は集団全体の収穫物

として扱われ、換金の際にも先ず集団に対して支払われた。

ノーフリートが1850年代に記した『プランテーション日誌』(Plantation Journal) は、プランテーション耕地との労働比較においてストッキング・スラッシュ畑の性格、特徴を鮮明化してくれる。1856年4月12日土曜日—通常土曜の午後は労働休業となり、ノーフリートは奴隷たちに彼ら自身の作物栽培を許可した—「ニグロたちのトウモロコシのために」ストッキング・スラッシュ畑が鋤耕作された。その23日後の5月5日月曜日、「ウォルナット・リッジ畑でトウモロコシ作付け作業終了。引き続き、ストッキング・スラッシュ畑にニグロ作物 [のトウモロコシ] を植える。これで、トウモロコシの作付け作業は完了。」また、1858年7月31日土曜日の欄を見ると、「トウモロコシの鋤手たち、第2諸島のアップー・フィールド低地で鋤耕作終了。続いてニグロ畑を鋤で耕す。これを以て、開墾地を除き、トウモロコシ用全耕地の鋤耕作を完了」とある。つまり、奴隷はプランテーション耕地作業に引き続いて集団/共同「耕作地」で同一作業に従事したのである。そして、作

第3図 「ニグロ・トウモロコシ」 個人別収穫・  
換金化例—ミシシッピ州キロナ・プランテーション

1838 Measurement of Corn Continued			
Slaves brought over			
108 Bushels - 3 Bushels - 3d 8 9452			
Frank	11		9452
Martha	6		487
James	5		325
John	2		151
George	3		225
John	11	gross	
Total		156 Bushels - 1 Bushel - 1d	
Total			\$102.14
Total			1158
Amount due each			\$115.98
including Corn & Fences			
Israel	23.44	for Corn & 50 Fences	26.64 Paid
Danny	5.17		3.18 Paid
Martha	6.28		6.12 Paid
Danny	6.84		7.52 Paid
Prophet	3.37		3.37 Paid
Lucy	4.50		5.20 Paid
Danny	9.40		11.27 Paid
Henry	3.07		3.43 Paid
Abel	2.53		2.75 Paid
Frank	6.46		8.02 Paid
Dick	12.09		13.27 Paid
Sarah	4.12		4.64 Paid
William	0.60		0.99 Paid
George	9.56		10.81 Paid
Thomas	3.57		3.69
Frank	9.25		9.51
Martha	0.97		0.97
Danny	0.75		0.75
Abel	1.80		1.80
George	0.25		0.25
Total			\$115.98

出典：Killona Plantation Journals, 1836-1844, volume 1, Mississippi Department of Archives and History, Jackson.

業の連続性に加えて注目すべきは、プランテーション耕地内の全てのトウモロコシ畑で作付け作業を終えた後に集団/共同「耕作地」で作付けを行っている点である<sup>50)</sup>。このことは、ストックキング・スラッシュ畑がプランテーション耕地労働に組み込まれてはいたが、その扱いは全く平等という訳ではなく、プランテーション耕地労働の優位性が依然保持されていたことを意味する<sup>51)</sup>。先に、コリンズ 3世のプランテーションでは「ニグロ耕地」労働がコリンズ自身の畑に比してかなり小規模編制で一しばしば 1名で一行われた点を指摘したが、プランテーション耕地労働の優位性は、そのように働き手の人数となって具現することも、あるいはノーフリートの場合のように作業進行順位の形で表出することもあった。

このように、ある特定の作業—特に、作付けや収穫など最良時機の日取り選定の僅かな違いが成果に大きな差をもたらすような作業—を行う場合、概して集団/共同「耕作地」での作業はプランテーション耕地よりも遅れて行われる傾向にあった<sup>52)</sup>。それがプランテーション作物を優先させる奴隷主政策であったことは言をまたない。アラバマのあるプランターは1852年 1月号の『南部季刊評論』(Southern Quarterly Review)

に自らの「耕作地」の実践報告をし、「もし彼らが仕事に励み、わたしの作物をきちんと植えたら、その時は彼らの作物を植えさせることにしよう」と述べ、実際その策が奴隷の大きな労働刺激となっている点を伝えている。「時機を逸することなく」自身の作物を世話したいというのが奴隷たちの強い思いだったからである<sup>53)</sup>。

これとの関連で指摘しておく、奴隷制史家の多くは、週末の労働休業時間帯における「耕作地」活動を奴隷に対する特別許可、ボーナスといった報奨的な捉え方をしてきた。だが、プランテーション耕地に組み入れた集団/共同「耕作地」の場合には多少事情が異なってくる。確かに平日昼間時間帯の集団/共同「耕作地」活動は大きな報奨的、労働刺激的要素を有していた。しかし、過度の「耕作地」労働の容認はプランテーション労働の犠牲、損失を意味した。このため、プランターは作付け、収穫作業など特に何日かの集中的労働を要する作業にあっては、週末もしくは平日に週末を絡めて集団/共同「耕作地」労働をスケジュール化した<sup>54)</sup>。つまり、集団/共同「耕作地」の場合、週末労働許可は奴隷に対する報奨というよりも、プランター自身が自己の耕地労働時間を確保するための策に他ならなかった。このことから分かるように、集団/共同「耕作地」運営の難しい点は、ど

の程度プランターが自己利益優先の要素をプランテーション耕地労働の中に組み込むか、その判断にあった。そして当然この点が奴隷主＝奴隷間の交渉、駆け引きの対象となったことは想像に難くない。

以上のように、集団/共同「耕作地」労働はプランテーション耕地労働に組み込まれ、大枠においてプランテーション労働スケジュールに沿って進められた。強制労働時間帯に自己利益に直結する労働が可能となった点は、奴隷たちにとっては大きな利点と映ったに相違ない。一方プランターは、時間、空間的にプランテーション耕地と有機的に結び付けられたこうした「耕作地」が奴隷の労働意欲を十分引出し得るものと確信し、その精力的労働を自身のための労働に引き込もうとした。とりわけ、作付け、収穫という作物栽培の重要な局面において、プランターはプランテーション作物の優先を盾として一時機を逸しない作業を強く望む奴隷の願望を逆手に取って一奴隷を自主的、意欲的に労働させることに傾注した。

さて、奴隷主は集団/共同「耕作地」を奴隷集団に割り当てる際、その土地を細分化して奴隷個々人に与えるようなことは一般にはしなかった。しかし、中には年齢、性、労働能力など一定の尺度に基づき、個人毎に割当面積を定める一割当面積を設定はしたが、実際に与えたのではない一方式を採用する者もいた。ただし、その場合、設定された割当面積に従って奴隷個々人がその土地を耕作、収穫した訳ではない。もしそうであれば、それは個人用「耕作地」ということになる。労働はあくまでも集団として行われた。収穫を奴隷間分配する際、公平性を保つ一つの基準として割当面積が利用されたのである。このように、何らかの基準により個々人の割当面積を予め設定しておくような集団/共同「耕作地」を次に検討してみよう。

アラバマのある小プランターは奴隷たちに「ニグロ集団耕地」(negroes' field)を与え、年齢と性を基準に「男たち[全体]に2エーカー、女たち[全体]には1エーカー、子供たち[全体]には半エーカー」を割り当てた。労働は集団で交替制により耕地全体で行い、収穫の分配は畑面積に応じた比例配分方式であった。また、奴隷84名を所有するジョージアのあるプランターが1851年、同州農業組合の『会報』(*Transactions*)に寄せた報告は、集団/共同「耕作地」における奴隷の実際の労働を知る上で有益である。すなわち、「各人が別々の区画された畑を持つという訳ではありません。各人が一人当たり1エーカー程度の小規模な作付けを行います、それは奴隷たちに与えられたトウモロコシ用の耕地での労働全体のために行うのであります。そして、誰もが[読者の皆さんも、もし世話することになったら]自分の作物をそうするように、各人がそれぞれの作物の世話をするので。」ここから、個々人の行うべき種々の作業が1エーカー程度と面積で明確化されていること、しかし、それがあくまでも全体のための労働であって、個人の収穫・収益に直結する性質のものではないことが分かる<sup>55)</sup>。

上の二つの方式は、基本的にはどちらも集団/共同「耕作地」全体から上がる収益を奴隷間で分配するやり方である。ところが、中には作物収益の考え方をプランテーション耕地全体にまで拡大適用し、両耕地を一緒に耕作し、収穫時にはプランテーション耕地全体に占める集団/共同「耕作地」面積比率で奴隷たちに収穫を分配する方式の集団/共同「耕作地」も存在した。プランテーション耕地と集団/共同「耕作地」の運営及び収益の境界線がかなり曖昧になる方式であるが、集団/共同「耕作地」形態の集団性、共同性の持つ意味、またそれがプランターたちにとって経営政策理念上、プランテーション耕地と不可分の関係にあったことを想起させる点で重要である。一例を挙げよう。

それは1854年、北部人牧師ニーマイア・アダムズ (Nehemiah Adams) がジョージア州のあるプランテーションに立ち寄った際のことであった。彼は、個人や家族用の「耕作地」の他に、集団/共同「耕作地」が存在することに気付いた。「農園主の中には、自分の労働者たち〔奴隷たち〕に彼ら自身の作物栽培のために一部の土地を提供し、そこで働くために一定の時間を与えている者もいます。一方、全収穫量の中からそのような土地の割当てに相当する分量を労働者たちに与えるやり方の方を好む農園主たちもいるのです」と、彼は旅行記に書いている<sup>56)</sup>。集団/共同「耕作地」には、このように個々の構成員の労働能力に対する公正さ、労働意欲の高揚、あるいは集団全体の収益を構成員間に分配することを視野に入れて運営していったプランターもいたのである。以下、対奴隷労働刺激策を盛り込んだプランターたちの創意に富んだ集団/共同「耕作地」の例を見てみたい。

1852年にルイジアナ州のある大プランテーションに数ヶ月間滞在したウィリアム・ホルクーム (William H. Holcombe) は、奴隷が自分自身のために行う労働を観察し、その様子を雑誌『ニッカーボッカー』 (*Knickerbocker*) 1861年 6月号の中で伝えている。「ニグロたちはトウモロコシ畑を耕すことが許されており、能力と意欲のある者には各々、実に多くの畝が与えられています。主人は市場相場で生産物を引き取り、収益は労働者たちの間で公平に分けられます。実際に支払われる金額は、働くニグロの数や働きぶり、その年の作柄に応じて、100ドルから500ドルまで様々です。」年齢や性を基準に機械的に土地を割り当てることをせず、本人の労働能力や意欲を重視して割り当て、労働刺激・誘因を与える方式であった。ただし、この場合にも労働は奴隷用トウモロコシ畑全体を全員で一実際には交替制で—行う形が採られているのである<sup>57)</sup>。

もう一つの例は、プランテーション耕地労働と結び付けたアラバマ州のある奴隷主の実践例である。彼は、プランテーション耕地、集団/共同「耕作地」の両耕地で栽培した作物を「刈り分ける方式」 (sharing) を採用した。それは、予め各奴隷に割当区画地を与えておき、「主人のために〔プランテーション耕地で〕精力的に働いた」者にはその報奨として集団/共同「耕作地」内の「その者の土地を他の労働者〔奴隷〕全員で耕作する」システムであった。プランテーション耕地における勤労さ、精力的労働を「耕作地」における労働免除というボーナスに直結させた、単純ではあるが効果的な報奨制であった。と同時に、労働刺激・誘因策として機能した集団/共同「耕作地」の運営の中に、更に報奨制を盛り込んだ二重の労働刺激策でもあった<sup>58)</sup>。

最後に、集団/共同「耕作地」を個人用「耕作地」と連繋させて運営した例を見てみよう。従来の研究では、個人用「耕作地」は奴隷が希望する限りは奴隷主がかなり柔軟に対応し、「耕作地」を極力与えたことが分かっている<sup>59)</sup>。個々の奴隷の労働意欲を最大限引き出すことを狙った策であった。そのため、「個人用」耕作地にあつては、生産物の売却はほとんどの場合、容認されていた。このような性格を持つ「耕作地」を集団/共同「耕作地」と併用することにより、耕作利潤の極大化を目指したプランターがいた。ノース・カロライナ州でトウモロコシの商業的生産を展開していたエベネツァー・ペティグルー (Ebenezer Pettigrew) とその息子ウィリアム・ペティグルー (William Pettigrew) である。1818年から1852年まで親子2代に亘って奴隷たちと取引をした帳簿には奴隷が「耕作地」で盛んにトウモロコシを生産し、主人に売却していた記録が埋もれている。奴隷個々人によるトウモロコシ売却を年次別に整理し、売却額ないし売却高を奴隷間で比較してみると、売却したそのトウモロコシが集団/共同「耕作地」で生産されたものなのか、それとも個人用「耕作地」で生産されたものなのか、一目瞭然である (第2表、第3表)<sup>60)</sup>。

各表を奴隷の視点から読み取ると、1819年、1821年、1823年、1827年、1835年、1836年、1853年の各年に売却したトウモロコシは集団/共同「耕作地」で生産したものである。それは、売却額ないし売却高を見ると、一部の例外を除いて全ての奴隷の金額、数量が同じであることから分かる。ただし、1819年の場合には成年男子奴隷は一律4.71ドルで売却しているが、女子奴隷—アーロン（Aron）のみ例外—は全て3.00ドルで売却している。これは、エベネツァーが集団/共同「耕作地」に従事した奴隷たちの労働を年齢、性によって差をつけたことを意味する。1819年以外の上記6年においては奴隷間に差はほとんど認められない。「耕作地」収益全体を人数で機械的に割ったものと考えられる。表中、個々人により金額ないし数量の異なる年にあつては、個人用「耕作地」でトウモロコシ生産が行われたと解される<sup>61)</sup>。

以上の考察から明らかなように、集団/共同「耕作地」を運営したプランターたちは、奴隷たち自身による共同運営方式には問題ありと認識し、「耕作地」運営に自ら関与していった。その基本的手法は、奴隷たちの「耕作地」労働をプランテーション耕地労働の中に組み込むことにより、昼間強制労働時間帯においてさえ彼らの自己利益に直結する経済活動を可能ならしめるというものであった。プランターは奴隷が「耕作地」活動に打ち込む精力的エネルギーをプランテーション耕地においても投入することを期待し、且つその達成に腐心した。このことを達成するためにプランターは、両耕地畑での労働融合・統合、ローテーション労働スケジュールの円滑な実施、作付けや収穫作業時における集団/共同「耕作地」に対するプランテーション耕地の優位先行労働、労働能力・意欲を重視した個々人への割当地の設定、集団/共同「耕作地」への報奨制の導入、集団/共同「耕作地」と個人用「耕作地」の緊密な関係・併用など、巧妙で独創的な種々の方策を創出した。これらは、アンティバラム南部商品作物生産の主導的役割を果たした企業家的・資本主義的プランターが利潤極大化のために極力多くの耕作奴隷の労働生産性増大を狙った、優れて戦略的な政策なのであった。

## 結びにかえて

アンティバラム南部奴隷制プランテーションで発達した合理的、効率的経営システムの中で、集団/共同「耕作地」はプランターによる奴隷労働管理の一政策として重要な役割を果たした。それは、奴隷小屋に隣接したいわゆる家族用菜園や個人用「耕作地」とはかなり性格を異にするプランター主導型の「耕作地」であった。すなわち、プランターは集団/共同「耕作地」をプランテーション耕地中に設置し、昼間耕地労働スケジュールに組み込む形で運営した。一見プランターの畑のようであったが、名称、用益権が確立していた点に奴隷の財産であったことが確認される。労働は奴隷集団が交替制で行い、収穫は先ず集団として受け取り、それを後に奴隷間で分配した。プランターは、彼らの「耕作地」労働を自身のプランテーション昼間労働に組み入れることで、奴隷たちの意欲的、精力的労働が彼ら自身の集団/共同「耕作地」のみならず、プランテーション耕地においても深く浸透し、習慣化されることをねらった。

2世紀半に亘る南部奴隷制の歴史の中で、経済体制としての奴隷制がそれ以前にもまして堅固なものとなつていったアンティバラム時代に集団/共同「耕作地」の運営が確認できること自体、それ相応に機能していたことの証左となるであろう。現実においてもそのことを指し示す実践、効果が

確認される。端的には、1838年の「ニグロ耕地」の高い収穫高に驚愕したジョサイア・コリンズに対して、25年後の1863年、南北戦争中に奴隷66名が「ニグロ耕地」の拡大を要求した。アンティベラム期にコリンズが年間 3万ブッシェルものトウモロコシを生産し、繁栄した点と考え合わせれば、集団/共同「耕作地」は順調に機能していたと言えよう<sup>62)</sup>。同様の驚きは、フロリダ州中央部の綿花プランター、ジョージ・ジョーンズ (George Noble Jones) が日誌の中で、集団/共同「耕作地」の綿花生産高欄にのみ、「平均20ブッシェル」と、その高い数値に注目し、単位当たり収穫量を記載している点にも窺える<sup>63)</sup>。また、奴隷たちに120エーカーもの広大な集団/共同「耕作地」を与え、プランテーション耕地と共にその耕作活動を容認したミシシッピのナット・ハラーや、集団/共同「耕作地」を運営したプランターたちの実践した様々な創意工夫などにアンティベラム奴隷制下で果たした集団/共同「耕作地」の役割と機能が自ずと明確になる。それは、同時代において利潤追求を第一目標に掲げた企業家的・資本主義的プランターが一人でも多くの耕作奴隷の自主的労働意欲を高めることでプランテーション作物の収益を極大化しようと図った、優れて戦略的な労働政策なのであり、その創意に満ちた実践的運営、成果にいかにかそれが機能したかを知ることができるのである。

ところで、集団/共同「耕作地」で奴隷たちが見せた精力的労働をプランテーション耕地労働においても再現しようとした奴隷主の意図は、その「耕作地」運営に見え隠れする奴隷主の巧妙な一時には明確な一自己利益優先策のゆえに、両者間に目に見えぬ駆け引き、交渉を生じさせた。この両者間の摩擦は、奴隷制の幕が下りると同時に、解放民 (freedpeople) と旧プランターの土地及び労働収益をめぐる公然たる利害衝突、真っ向からの対立へと劇的な変化を遂げることになる。

[付記] 本稿は、平成17～19年度科学研究費補助金 (基盤研究C, 課題番号17520511) による研究成果を部分的にまとめたものである。

## 注

- 1) 家族成員を除く 2名以上の奴隷が一緒に自らの作物栽培に従事する形態の奴隷耕作地は、史料中“collective”ないしは“common”の形容を以て表現されている。以下、本稿ではこれらの語を「集団の」、「共同の」と解し、本形態を示す際には集団/共同「奴隷耕作地」と表記する。
- 2) 奴隷制下における「耕作地」は、一般にベクリウム (peculium)、すなわち主人の同意の下に使用し、それにより生じる利益を享受しうる用益権 (usufruct) が認められている財産と定義される。言うまでもなく、これは主人の権威によって存在するものであるから、主人が望めばその一部ないしは全てを取り消すことができた。Orlando Patterson, *Slavery and Social Death: A Comparative Study* (Cambridge: Harvard University Press, 1982), 182-183; 山本新他編訳『アメリカ大陸の奴隷制—南北アメリカの比較論争—』(創文社, 1978), 118頁; M. I. フィンレイ編, 古代奴隷制研究会訳『西洋古代の奴隷制—学説と論争—』(東京大学出版会, 1970), 19, 217頁。
- 3) Kenneth M. Stampp, *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South* (New York: Random House, 1956), 164. 疋田三良訳『アメリカ南部の奴隷制』(彩流社, 1988), 158頁 (以下、本書の引用は原書のみ記す)。
- 4) 奴隷主による「耕作地」付与を単なる慣習と位置付けている例として、Ira Berlin, *Many Thousands Gone: The First Two Centuries of Slavery in North America* (Cambridge: Harvard University Press, 1998), 34; “Time, Space, and the Evolution of Afro-American Society on British Mainland North America,” *American Historical Review* 85 (February, 1980), 65; Betty Wood, *Women's Work, Men's Work: The Informal Slave Economies of Lowcountry Georgia* (Athens: University of Georgia Press, 1995), 33, 201; Loren Schweninger, “The Underside of Slavery: The Internal Economy, Self-Hire, and Quasi-Freedom in Virginia, 1780-1865,” *Slavery & Abolition* 12 (September, 1991), 2-4; Alex Lichtenstein, “‘That Disposition to Theft, with Which They Have Been Branded’: Moral Economy, Slave Management, and the Law,” *Journal of Social*

*History* 21 (Spring, 1988), 424; Ralph Betts Flanders, *Plantation Slavery in Georgia* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1933), 146-147; Paul A. David, et al., *Reckoning with Slavery: A Critical Study in the Quantitative History of American Negro Slavery* (New York: Oxford University Press, 1976), 69-73. このような立場から奴隷による「耕作地」活動の自律性、独立性を強調している研究例を知るには、Tutomu Numaoka, "The Land for Slaves Reconsidered: A Strategy for the Management of Slave Labor in the Antebellum South," *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar, 2004* (Kyoto: Ritsumeikan University, 2005), 113を参照。

また、地域は異なるが、カリブ海諸島に見られる「耕作地」研究の権威シドニー・ミンツ (Sidney W. Mintz) は、「耕作地」を付与した奴隷主側の判断について次のように述べている。「奴隷の自給農作はあくまでもプランターによって、意識的に導入され促進されたものだったことは忘れてはならない。知恵のはたらく農園主たちは、隷属者によりよい食生活をさせること、わずかな収入を得させること、土地を持たせることによって、彼らの不満が和らげられ、逃亡や反抗の危険も減じることを、素早く計算したのである」と。これは、南部奴隷制下の「耕作地」を位置付ける上できわめて的確な指摘として受け止められよう。シドニー・W・ミンツ著、藤本和子編訳『アフリカン・アメリカン文化の誕生』(岩波書店, 2000), 170-171頁。Eugene D. Genovese, *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York: Pantheon Books, 1974), 536-537.

- 5) 70年代奴隷制研究の大きな特徴は、それ以前の研究が奴隷主側史料に依拠していたのに対し、奴隷側史料に基づき、奴隷たちが主人の監視の及ばない生活空間において彼ら自身の奴隷文化を創出し、決して白人による圧制の単なる犠牲者、客体とはならず、自己の権利を守り、社会や文化を積極的に創造してゆく主体になりえたことを示した点にあった。しかしながら、80年代に入ると、奴隷の人間的生活を可能ならしめる社会的・文化的組織網としての「奴隷コミュニティ」の堅固さ・団結力をあまりに過大評価し過ぎているとの批判が上がった。例えばピーター・コルチン (Peter Kolchin) は、70年代の奴隷制研究はそれ以前のサンボ奴隷像の破壊には貢献したが、勢いその反動として「奴隷生活を讃美し、神話化する傾向にさえ走っていった」と述べ、今や古い「サンボ神話」に替わり、「ユートピア的奴隷コミュニティ」(the utopian slave community) なる新しい神話が生まれてきている、と通烈に批判した。Peter Kolchin, "Reevaluating the Antebellum Slave Community: A Comparative Perspective," *Journal of American History* 70 (December, 1983), 601.
- 6) 合衆国奴隷制はアンティベラム期に入ると、植民地時代のそれとは性格を異にし、経営の合理化が推し進められた。利潤極大化を意識した多くのプランターは、当時南部各地で発行されていた農業誌、経済誌に自身の経営実践を投稿することにより、相互に最新情報を得た。奴隷の衣食住環境の改善運動が急速に高まっていったのもこの時代であった。また、市販の農場日誌も急速に普及していき、プランターは奴隷の日々の労働内容を克明に記していった。こうして、プランテーションは近代的労務管理体制の下で経営されていった。Michael Mullin, ed., *American Negro Slavery: A Documentary History* (New York: Harper & Row, Publishers, 1976), 133; Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, 524; 小山起功『黒人史講義—アメリカもう一つの原点』(彩流社, 2005), 462頁。
- 7) Mullin, ed., *American Negro Slavery*, 133.
- 8) Stamp, *The Peculiar Institution*, 288.
- 9) Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, 544.
- 10) Ralph B. Flanders, "Two Plantations and A County of Antebellum Georgia," *Georgia Historical Quarterly* 12 (March, 1928), 7; George P. Rawick, ed., *The American Slave: A Composite Autobiography* (41 vols. and index; Westport, Conn.: Greenwood Publishing Company, 1972-1981), volume 6, *Alabama Narratives*, 64 (以下、Rawick, vol. 6, Ala., 64と略記); vol. 8, pt. 2, *Ark.*, 32; vol. 10, pt. 6, *Ark.*, 99; vol. 11, pt. 7, *Ark.*, 89; vol. 12, part 2, *Ga.*, 139; vol. 13, part 3, *Ga.*, 150, 250; vol. 18, *Unwritten*, 183; Rawick, supplement series 1, volume 8, part 3 (以下、sup. ser. 1, vol. 8, pt. 3と略記), *Miss.*, 863, 938, 1215, 1228-1229; sup. ser. 1, vol. 9, pt. 4, *Miss.*, 1663; sup. ser. 2, vol. 8, pt. 7, *Tex.*, 3263; Stamp, *The Peculiar Institution*, 288; Julia Floyd Smith, *Slavery and Plantation Growth in Antebellum Florida, 1821-1860* (Gainesville: University of Florida Press, 1973), 70; Ulrich B. Phillips, "Plantations with Slave Labor and Free," *American Historical Review* 30 (July, 1925), 743; William Franklin Bozeman, "Martin Wilson Philips, Mississippi Planter," (M. A. Thesis, Louisiana State University, 1937), 126. 昼食ばかりでなく、朝食も畑に運んだ例としては、例えば、Rawick, vol. 8, pt. 2, *Ark.*, 32; vol. 12, part 1, *Ga.*, 82; vol. 17, *Fla.*, 243; sup. ser. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938, 1215, 1269; sup. ser. 2, vol. 2, pt. 1, *Tex.*, 133; Frederick Law Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States* (New York: Negro Universities Press, 1968, c. 1856), 431-



- 432; Elizabeth Silverthorne, *Plantation Life in Texas* (College Station: Texas A & M University Press, 1986), 116; Rosa Groce Bertleth, "Jared Ellison Groce," *Southwestern Historical Quarterly* 20 (April, 1917), 361-362; John Witherspoon DuBose, "Recollections of the Plantation," *Alabama Historical Quarterly* 1 (Summer, 1930), 116. 土曜、日曜も含め、毎日耕作奴隷に食事を配給した例として、Ulrich B. Phillips and James Glunt, eds., *Florida Plantation Records from the Papers of George Noble Jones* (Gainesville: University Press of Florida, 2006, c. 1927), 209-284.
- 11) Virginia Van der Veer Hamilton, *Alabama: A Bicentennial History* (New York: W. W. Norton & Company, 1977), 62; Stamp, *The Peculiar Institution*, 57. 共同炊事場に関する指摘、及びそこで調理した昼食を畑へ運搬したとする証言については、差し当たり次のものを参照。William Dosite Postell, *The Health of Slaves on Southern Plantations* (Gloucester: Peter Smith, 1970, c. 1951), 37; Joe Gray Tolor, "Slavery in Four Northeastern Cotton Parishes of Louisiana," (M. A. Thesis, Louisiana State University, 1948), 59; Everett Dick, *The Dixie Frontier: A Social History of the Southern Frontier from the First Transmontane Beginnings to the Civil War* (Norman: University of Oklahoma Press, 1993, c. 1948), 83; *De Bow's Review* 10 (June, 1851), 623-624; 11 (October, 1851), 370-371; Rawick, vol. 6, *Ala.*, 370; vol. 8, pt. 2, *Ark.*, 32; vol. 13, pt. 4, *Ga.*, 198; vol. 17, *Fla.*, 243; sup. ser. 1, vol. 6, pt. 1, *Miss.*, 36, 209; sup. ser. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 938, 1262; sup. ser. 1, vol. 11, *S. C.*, 130; vol. 11, pt. 7, *Ark.*, 89; vol. 12, part 1, *Ga.*, 82; sup. ser. 2, vol. 2, pt. 1, *Tex.*, 133, 145; Meriwether Harvey, "Slavery in Auburn, Alabama," *Alabama Polytechnic Institute Historical Studies*, 3<sup>rd</sup> ser. (1907), 5.
- 12) Rawick, vol. 13, pt. 4, *Ga.*, 198; sup. ser. 1, vol. 6, pt. 1, *Miss.*, 36; vol. 17, *Fla.*, 243; Dick, *Dixie Frontier*, 83; Tyson Gibbs, Kathleen Gargill, Leslie Sue Lieberman, and Elizabeth Reitz, "Nutrition in a Slave Population: An Anthropological Examination," *Medical Anthropology* 4 (Spring, 1980), 229; Genovese, *Roll, Jordan, Roll*, 544; V. Alton Moody, *Slavery on Louisiana Sugar Plantations* (New York: Ams Press, 1976, c. 1924), 75; Tolor, "Slavery in Four Northeastern Cotton Parishes," 59-60.
- 13) "Memorandum of directions to the manager of my business for the year 1846 and to which the partial attention of Mr. Sooggin is requested," Ball and Crommelin Papers, Alabama Department of Archives and History, Montgomery (以下、ADAと略記); Solomon Robinson, *Pioneer and Agriculturist*, 2 volumes (Indianapolis: Indiana Historical Bureau, 1936), vol. 1, 487.
- 14) Abigail Curlee Holbrook, "A Glimpse of Life on Antebellum Slave Plantations in Texas," *Southwestern Historical Quarterly* 76 (April, 1973), 369-370; Bertleth, "Jared Ellison Groce," 361-362.
- 15) Rawick, sup. ser. 1, vol. 6, pt. 1, *Miss.*, 209; vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 82; sup. ser. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 1262; Harvey, "Slavery in Auburn," 5; sup. ser. 1, vol. 12, *Okla.*, 257.
- 16) Rawick, sup. ser. 2, vol. 10, pt. 9, *Tex.*, 4088; sup. ser. 1, vol. 8, pt. 3, *Miss.*, 1262; Harvey, "Slavery in Auburn," 5.
- 17) Smith, *Slavery and Plantation Growth*, 70. プランテーション日課労働としての燃料材集めに関しては、Lewis Cecil Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, 2 volumes (Washington, D. C.: Carnegie Institution, 1933; reprint ed., Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1958), vol. 1, 563; Ron Tyler and Lawrence R. Murphy, eds., *The Slave Narratives of Texas* (Austin: Encino Press, 1974), 27; Walter Prichard, "Routine on a Sugar Plantation Under the Slavery Regime," *Mississippi Valley Historical Review* 14 (1927), 172-173; Rawick, vol. 4, pt. 2, *Texas.*, 18. また、未開墾地の樹木伐採に続く牽引作業は一般に「丸太転がし」(log rolling) と呼ばれ、重労働ではあったが燃料材確保の重要な仕事であり、「とうもろこし皮むき作業」(corn shucking) 同様、年間労働スケジュールにおいて奴隷共同作業の代表的な位置を占めていた。Silverthorne, *Plantation Life in Texas*, 127. 精力的な労働者にタバコ支給等のインセンティブを与えた点、プランターの報奨制に基づく奴隷労働政策の一環としても理解される。
- 18) Rawick, vol. 3, pt. 4, *S. C.*, 248; vol. 4, pt. 2, *Tex.*, 18, 293; Silverthorne, *Plantation Life in Texas*, 133; Ron Tyler and Lawrence R. Murphy, eds., *The Slave Narratives of Texas* (Austin: State House Press, 1974), 27. 中には、切出・運搬してきた燃料材の内、奴隷用を彼らの「居住区内燃料置場」(quarter yard) に置かせたプランターもいた。Phillips and Glunt, eds., *Florida Plantation Records*, 275. 燃料材小屋に関しては、John Michael Vlach, *Back of the Big House: The Architecture of Plantation Slavery* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1993), 86; Somerset Place: An Antebellum Plantation Community, Division of Archives and History, Department of Cultural Resources, North Carolina Historic Sites. 一例として、アンティベラム期に300名前後の奴隷を所有していたノース・カロライナのとうもろこし

- プランター、ジョサイア・コリンズ3世 (Josiah Collins III) の館には暖炉が10箇所あり、冬季間には常時2名の奴隷が丸太を切り、燃料材小屋 (wood house) に貯蔵する任に当たっていた。Uriah Bennett interview, "Scuppernong Farms Project (RF-NC 25), Washington and Tyrrell Counties," vol. 1, chapter 8, the Resettlement Administration, U. S. Department of Agriculture, comp., in the Farm Security Administration Papers, 2 vols., North Carolina Division of Archives and History, Raleigh (以下、NCAHと略記); William S. Tarlton, *Somerset Place and Its Restoration* (Raleigh: Division of State Parks, North Carolina Department of Conservation and Development, 1954), 54.
- 19) 南北戦争以前の時代には共有権に対する私有権の優位性が明確には確立されていなかった。たとえ私有地であろうとも未開墾状態であれば、誰もがその土地に対して同等の使用権を有していた。アンティベラム期の法律では、土地所有者は自分で自分の作物を守る義務を負っていた。例えば、壊れたフェンスの間隙から侵入してきた豚に作物を荒らされても、家畜所有者には責任がなかった。家畜の囲い込みではなく、耕作地の囲い込みが戦前南部の法的要請なのであった。このような南部において、フェンスで囲われていない未開墾地は一般市民が狩猟、放牧、魚釣り、木の実の採集など日々の食生活に密着した様々な活動を行える共同地なのであった。Joseph P. Reidy, *From Slavery to Agrarian Capitalism in the Cotton Plantation South: Central Georgia, 1800-1880* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1992), 69-70, 270-271; Steven Hahn, "Hunting, Fishing, and Foraging: Common Rights and Class Relations in the Postbellum South," *Radical History Review* 26 (1982), 37-43; George W. McDaniel, *Hearth & Home: Preserving a People's Culture* (Philadelphia: Temple U P, 1982), 145-146. 当時、南部諸州が定めたフェンス及び家畜侵入に関する法律として、David J. McCord, *The Statutes At Large of South Carolina* (Columbia, South Carolina, 1839), 331-332; A. Hutchinson, *Code of Mississippi, 1798-1848* (Jackson, Mississippi, 1848), 278-280; John J. Ormond, Arthur Bagby, and George Goldwaite, *Code of Alabama* (Montgomery, 1852), 250-251; Williamson S. Oldham and George W. White, *A Digest of the General Statute Laws of the State of Texas* (Austin, 1859), 217-218; Thomas R. R. Cobb, *A Digest of the Statute Laws of the State of Georgia* (Athens, 1851), 18-19; R. H. Clark, T. R. R. Cobb, and David Irwin, *The Code of the State of Georgia* (Atlanta, 1861), 271-272.
- 20) 奴隷主菜園の野菜を奴隷に支給した点に関しては、Olmsted, *Journey in the Seaboard Slave States*, 659; Rawick, vol. 3, pt. 3, S. C., 192; vol. 6, *Ala.*, 238; vol. 11, pt. 7, *Ark.*, 51; vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 197; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 73. 拙論「プランテーション経営における『奴隷主菜園』の役割—サマーセット・プレイス・プランテーションを中心として—」『新潟大学言語文化研究』3 (1997年), 75-88. 一方、プランテーション耕地中の菜園・野菜畑の奴隷野菜供給に関しては、Sam Bowers Hilliard, *Hog Meat and Hoecake: Food Supply in the Old South, 1840-1860* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1972), 173-174; *Southern Cultivator* 18 (1860), 183; Rawick, vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 191; sup. ser. 1, vol 4, pt. 2, *Ga.*, 668; sup. ser. 1, vol 5, *Ohio.*, 360; sup. ser. 1, vol 8, pt. 3, *Miss.*, 938; sup. ser. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830; Charles Perdue, Jr., Thomas Barden, and Robert Phillips, eds., *Weevils in the Wheat: Interviews with Virginia Ex-Slaves* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1976), 81; Ronald Killion and Charles Walter, eds., *Slavery Time When I Was Chillan Down on Master's Plantation* (Savannah: Beehives Press, 1973), 8, 68.
- 21) Daniel H. Usner, Jr., "Frontier Exchange and Cotton Production: The Slave Economy in Mississippi, 1798-1836," *Slavery and Abolition* (April, 1999), 30; Smith, *Slavery and Plantation Growth*, 70; Janet Sharp Hermann, "The Black Community at Davis Bend: The Pursuit of a Dream," (Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley, 1979), 16; Carlyle J. Sitterson, *Sugar Country: The Cane Sugar Industry in the South, 1753-1950* (Lexington: University of Kentucky Press, 1953), 98-99; Albert Burton Moore, *History of Alabama* (Tuscaloosa: Alabama Book Store, 1934), 363; Harvey, "Slavery in Auburn, Alabama," 6.
- 22) Smith, *Slavery and Plantation Growth*, 70.
- 23) Rawick, vol. 2, pt. 2, S. C., 59; Gray, *History of Agriculture*, vol. 1, 563.
- 24) 耕作奴隷労働管理のシステム化、及びプランテーション管理の基本原則に関するクーパーの考え方については、*Southern Agriculturist* 6 (November, 1833), 571-572.
- 25) 労働能力等級が記載されている労働日誌例を若干挙げておくと、Journal for Rockingham Plantation, 1828-1829, Rare Book, Manuscript, and Special Collections Library, Duke University, Durham, North Carolina (以下、DUKEと略記); Hugh Fraser Grant, *Planter Management and Capitalism in Ante-Bellum Georgia: The Journal of Hugh Fraser Grant, Ricegrower* (New York: Columbia University Press, 1954), 252-260. 格付け等級に関しては、差し当たり以下を参照。

- Gray, *History of Agriculture*, vol. 1, 547-550; Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States*, 433; *Southern Agriculturist* 6 (November, 1833), 571-572; *Southern Agriculturist* 7 (August, 1834), 402-408; Mullin, ed., *American Negro Slavery*, 140-141; Ulrich B. Phillips, "The Origin and Growth of the Southern Black Belts," *American Historical Review* 11 (July, 1906), 804; Stamp, *The Peculiar Institution*, 57-58.
- 26) Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States*, 432, 437. 従来労働編制に関しては、綿作は集団制、米作は課業制といった二分法的理解が一般的であったが、必ずしもそうとはいえない。両編制形態の融合型労働制度が課業制の支配的なサウス・カロライナ州、ジョージア州の沿岸地域に見られたとの指摘はグレイの研究にも見出せる。Gray, *History of Agriculture*, vol. 1, 551. 課業制が奴隷個人のイニシアティブを重視する労働制でありながらも、集団活動 (communal activity) 的側面—労働歌など—も持ち合わせていたとする点に関しては、Daniel C. Littlefield, *Rice and the Making of South Carolina* (Columbia: South Carolina Department of Archives and History, Public Programs Division, 1995), 28; Rawick, sup. ser. 2, vol. 3, pt. 2, *Tex.*, 518. また、両労働編制形態の相互依存性が課業制の支配的な米作地域においても見られたという指摘は、Julie Saville, *The Work of Reconstruction: From Slave to Wage Laborer in South Carolina, 1860-1870* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 7. 実際、米作地域のプランター記録には集団労働で対応せざるを得ない作業が検出される。"Plantation Work 1837," January 2, 4, 5, 6, 7, 14, 19, 20, 21, 24, 25, 27, 28, 30, 31, 1837; February 1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 1837, Manigault Family Papers, Georgia Historical Society, Savannah; Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States*, 430. 一方、集団制を基本とする綿作地域においても課業制が導入されていた点は、綿摘み労働等に典型的に見出されることから明らかである。課業制が一部地域の形態に止まらなかったという指摘や示唆については、例えば、Thomas Perkins Abernethy, *The Formative Period in Alabama, 1815-1828* (Montgomery, 1965), 165; Dick, *The Dixie Frontier*, 82.
- 27) 集団/共同「耕作地」について指摘ないし言及しているものとして、Stamp, *The Peculiar Institution*, 164; Larry E. Rivers, *Slavery in Florida: Territorial Days to Emancipation* (Gainesville: University Press of Florida, 2000), 29-30; W. J. Megginson, *African American Life in South Carolina's Upper Piedmont, 1780-1900* (Columbia: University of South Carolina Press, 2006), 128; Charles M. Clark, "Plantation Overseers in South Carolina, 1820-1860," (M. A. Thesis, University of South Carolina, Columbia, 1966), 28; Randall M. Miller and John David Smith, eds., *Dictionary of Afro-American Slavery* (Westport: Greenwood Press, 1988), 285.
- 28) Janet Schaw, *Journal of a Lady of Quality: Being the Narrative of a Journey from Scotland to the West Indies, North Carolina, and Portugal, in the Years 1774 to 1776*, edited by Evangeline W. Andrews and Charles M. Andrews (3rd edition, New Haven: Yale University Press, 1921), 176-177; *American Farmer*, Series 4, vol. 1, no. 10 (1846), 295 (傍点引用者); *New York Herald Tribune*, March 8, 1860. 次の史料も参照されたい。James Allen Plantation Book, 1860-1865 (Typescript), November 9, 1862, Mississippi Department of Archives and History, Jackson (以下、MAHと略記); Theodore Rosengarten, *Tombee: Portrait of A Cotton Planter* (New York: William Morrow, 1986), 543; Rawick, vol. 6, *Ala.*, 83; vol. 12, pt. 1, *Ga.*, 347; Ulrich B. Phillips, *Life and Labor in the Old South* (Boston: Little, Brown & Co., 1963), 283.
- 29) Duncan C. Heyward, *Seed from Madagascar* (Columbia: University of South Carolina, 1937), 184-185; Frances Leigh, *Ten Years on a Georgia Plantation Since the War* (New York: Negro University Press, 1969), 56-58.
- 30) 言うまでもなく、家族用、個人用「耕作地」は奴隷主の強制労働から解放された時間帯を利用して耕作に従事する土地であった。その土地は、どちらもプランテーション耕地から離れた所に立地していた。活動の自律性に関しては、家族用「耕作地」の場合には家屋隣接地ということもあり、かなり高かったが、奴隷主が特別な意図を以て与える個人用「耕作地」のケースでは、独立性、自律性が低くなる場合も認められた。例えば、プランテーション周縁部の未開墾「耕作地」は耕地拡大策の一環として個々の奴隷に一時には家族単位で一割当てられ、運営そのものに奴隷主が関与していった。Moses Grandy, *Narrative of the Life of Moses Grandy, Late a Slave in the United States of Ameica* (Boston: Oliver Johnson, 1844), 36-37; Charles Ball, *Slavery in the United States: A Narrative of the Life and Adventures of Charles Ball, a Black Man, Who Lived Forty Years in Maryland, South Carolina and Georgia, as a Slave* (New York: John S. Taylor, 1837), 166-167; John W. Blassingame, ed., *Slave Testimony: Two Centuries of Letters, Speeches, Interviews and Autobiographies* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977), 132; Rawick, ed., sup. ser. 1, vol. 3, pt.1, *Ga.*, 251-252; sup. ser. 2, vol. 9, pt. 8, *Tex.*, 3654, 3828.
- 31) Phillips and Glunt, eds., *Florida Plantation Records*, 429; James Allen Plantation Book, 1860-1865 (Typescript), March

- 25, 29, April 1, November 9, 1862, March 14, 1863, MAH; John Gamble Diary, 1835, 1851, Jefferson County Historical Society, Monticello, Florida; Rivers, *Slavery in Florida*, 29-30; Killona Plantation Journals 1836-1844, 2 volumes, volume 1, MAH (Microfilm); Account Book, December 25, 1846, Eli J. Capell Family Papers, Louisiana and Lower Mississippi Valley Collections, Louisiana State University Libraries, Baton Rouge, Louisiana; Philip N. Racine ed., *Piedmont Farmer: The Journals of David Golightly Harris, 1855-1870* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1990), 294; Rawick, vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 131; Megginson, *African American Life*, 128, 455; Journal of Araby Plantation, 1843-1850, 94, DUKE. エラビ・プランテーションの奴隷総数は153人と思われる。 *Ibid.*, 137.
- 32) James O. Breeden, *Advice Among Masters* (Westport: Greenwood Press, 1980), 14, 275; "Sketches of Plantation-Life," *The Knickerbocker* 57 (June, 1861), 622-624; "Account of Cotton Picked at Hopeton, 1818-1831," James Hamilton Couper Plantation Records #185-z, vol. 3, Southern Historical Collection, Wilson Library, University of North Carolina at Chapel Hill, 30-44 (以下、SHCと略記); Charles Sir Lyell, *A Second Visit to the United States of North America*, 2 volumes (New York: Harper and Brothers, Publishers, 1849), vol. 1, 268; Amelia M. Murray, *Letters from the United States, Cuba and Canada* (New York: G.P. Putman and Company, 1856), 222; James Emmett Bagwell, "James Hamilton Couper, Georgia Rice Planter," (Ph.D. dissertation, University of Southern Mississippi, 1978), 257-258.
- 33) Rawick, sup. ser. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830. プランテーション耕地の片隅に設置された全奴隷用菜園・野菜畑はアンティベラム期に現出したもので、その背景には同時期における奴隷の衣食住改善運動の高揚があった。利潤極大化を狙うプランターは、奴隷の労働意欲を引き出すには配給食糧の充実化は言うに及ばず、野菜を常に豊富に与えることが肝要であるとした。この結果、奴隷に対する「奴隷主菜園」の野菜供給は勿論、プランテーション耕地内に全奴隷向けの広い菜園・野菜畑を設置するに至った。奴隷主はこの菜園・野菜畑を自らの所有、運営下にあるものと認識していたが、その管理はゆるやかで、奴隷たちのかかなり自由な野菜の消費、時に売却行為を容認していた。このため、「耕作地」と非常に近い性格を帯びていた。中には「ニグロ・サツマイモ畑」といった名称を付け、明確に奴隷用根菜類畑であることを示す例もあった。これは、集団/共同「耕作地」へと変容したものと考えられる。この意味で、全奴隷用菜園・野菜畑は集団/共同「耕作地」に変わる可能性を十分秘めた潜在的集団/共同「耕作地」と言えよう。本菜園・野菜畑の果たした歴史的役割はこれまで研究者たちに等閑視され過ぎてきた観が深い。本テーマに関しては、別に稿を改めて論じる用意がある。プランテーション耕地内の全奴隷用菜園・野菜畑に関してある程度知るには、*Southern Agriculturist* 3 (1830), 417, 419; *Southern Cultivator* 18 (1860), 183; Killion and Walter, eds., *Slavery Time*, 8, 68; Sam Bowers Hilliard, *Hog Meat and Hocake: Food Supply in the Old South, 1840-1860* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1972), 173-174; Rawick, vol. 10, pt. 6, *Ark.* 104; vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 182; vol. 13, pt. 3, *Ga.*, 247; sup. ser. 1, vol. 4, pt. 2, *Ga.*, 410-411; sup. ser. 2, vol. 7, pt. 6, *Tex.*, 2829-2830; Charles Ball, *Fifty Years in Chains; or, the Life of An American Slave* (New York: H. Dayton, Publisher, 1859), 107-108.
- 34) William L. Barney, *The Passage of the Republic: An Interdisciplinary History of Nineteenth-Century America* (Lexington, Mass.: D.C. Heath & Co., 1987), 29-30; Wayne Rasmussen ed., *Agriculture in the United States: A Documentary History* (1975), vol. 1, 863; R. Douglas Hurt, *Agriculture and Slavery in MISSOURI'S LITTLE DIXIE* (Columbia, Mo.: University of Missouri Press, 1992), 215-216; Gray, *History of Agriculture*, vol. 2, 539; *Southern Agriculturist* 5 (1832), 181-184.
- 35) Plantation Book 1857-1858, James Henry Hammond Papers, South Caroliniana Library, University of South Carolina, Columbia (以下、SCLと略記); "Edward Spann Hammond's Views on Agriculture 1857-1858" in Spann Hammond's Diary 1857, James Henry Hammond Papers, SCL; Farm Book, 1856-1858, December 19, 1857, October 29, 1858, Hugh Davis Papers, W. S. Hoole Special Collections Library, University of Alabama, Tuscaloosa (以下、HSCと略記); Eddie B. Rozelle, *Recollections: My Folks and Fields 1900* (Talladega, Alabama, 1960), 15.
- 36) Virginia Brown and Jane Nabers, "Mary Golden Duffee's 'Sketches of Alabama'," *Alabama Review* 9 (1956), 228; Moore, *History of Alabama*, 363, 452. 集団/共同「耕作地」での綿花栽培の例として、"Mulberry Tree Cut," Plantation Records, 1860-1911, Charles and Company, SCL; Rawick, vol. 4, pt. 1, *Tex.*, 85; vol. 5, pt. 3, *Tex.*, 214-215; vol. 12, pt. 2, *Ga.*, 131. タバコの栽培方法に関しては、*Ibid.*, sup. ser. 2, vol. 5, pt. 4, *Tex.*, 1525; Moore, *History of Alabama*, 357; Harvey, "Slavery in Auburn, Alabama," 5.
- 37) Olmsted, *A Journey in the Seaboard Slave States*, 434. 注25, 26も参照。
- 38) Journal of Araby Plantation, February 16, 21, 22, March 18, 1844; March 14, 15, 16, 18, 19, 1844, DUKE.

- 39) Memorandum Book (P. C. 417.12), 7, Josiah Collins Papers, NCAH.
- 40) Plantation Record from January 1850 to July 1853, June 19, 850, April 16, May 21, 1851, Josiah Collins Papers, NCAH. 「ニグロ耕地」に関しては、Memorandum Book, 7, Josiah Collins Papers, NCAH. 集団/共同「耕作地」がプランテーション耕地に空間的にも労働スケジュール的にも組み込まれていたことを示す他の例として、Phillips and Glunt, eds., *Florida Plantation Records*, 339-571; Stephen Norfleet Plantation Journal, 1856-1860, Norfleet Family Papers, SHC (Microfilm); Stephen Norfleet Account Book, 1844-1895, Norfleet Family Papers, SHC (Microfilm); Valcour Aime, *Plantation Diary of the Late Mr. Valcour Aime, Formerly Proprietor of the Plantation Known As the St. James Sugar Refinery, Situated in the Parish of St. James, and Now Owned by Mr. John Burnside* (New Orleans: Clark & Hofeline, 1878), DUKE (Microfilm); Farm Book, 1856-1858, Hugh Davis Papers, HSC; Plantation Journal of John D. Ashmore (Microfilm: Records of Ante-Bellum Southern Plantations from the Revolution through the Civil War, Series J, Selections from the SHC).
- 41) 1851年を例に、「ニグロ耕地」でわずか1名の鋤手が作業に従事した日を挙げると、Plantation Record, April 16, 22, 30, May 7, 10, 15, 16, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 26, 27, 28, 30, 31, 1851, Josiah Collins Papers, NCAH. <sup>ギャング・システム</sup>「集団制」編制より小規模なために厳格な監視体制から解かれ、半自律的な集団と化した状態の労働編制については、Philip D. Morgan, "Task and Gang Systems: The Organization of Labor on New World Plantations" in *Work and Labor in Early America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988), edited by Stephen Innes, 199-202.
- 42) James O. Breeden, ed., *Advice Among Masters: The Ideal in Slave Management in the Old South* (Westport: Greenwood Press, 1980), 275 (傍点引用者).
- 43) Guion Griffis Johnson, *A Social History of the Sea Islands: With Special Reference to St. Helena Island, South Carolina* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1930), 141; Charles Sir Lyell, *A Second Visit to the United States of North America*, 2 volumes (New York: Harper and Brothers, Publishers, 1849), vol. 1, 268 (傍点引用者); Murray, *Letters from the United States*, 222; William Allister Noble, "Sequent Occupance of Hopeton-Altama, 1816-1956," (M. A. Thesis, University of Georgia, 1956), 40-43; Lyell, *A Second Visit to the United States of North America*, vol. 1, 268; Bagwell, "James Hamilton Couper," 255-258.
- 44) Farm Book, 1856-1858, April 25, July 31, August 14, 31, December 19, 1857, Hugh Davis Papers, HSC (傍点引用者).
- 45) 「耕作地」は個人や家族単位でこそ労働意欲が湧くものであり、集団、共同では収益は望めないとの認識から、集団/共同「耕作地」の機能に否定的な立場の研究者もいる。Orville Vernon Burton, *In My Father's House Are Many Mansions: Family and Community in Edgefield, South Carolina* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1985), 160-161. 集団/共同「耕作地」を運営管理という観点から見ると、異なる状況下にあったとはいえ、1863年以降、解放された黒人たちが「集団ないし共同で土地を購入」(the collective or cooperative purchase)する動きが南部各地で散見された点に注意を向けることも必要であろう。解放民が土地を共同購入した事例の中には、生活共同体が組織され、労働が協力的体制の下で行われたケースがかなり見られる。それは土地の完全な共有制を意味するものではなかったが、黒人たちが自主的に共同体を組織した点、労働面での協力、集団性など、戦前の奴隷コミュニティ再考に示唆を与えてくれる。奴隷コミュニティは労働から解放された時間帯にのみ社会的集団として結束性、協調性を醸成、維持していった訳ではなかった。それは、彼らの労働面においても形成されていた。自分たちの集団/共同「耕作地」までの道のり、コーラス入りの歌を歌いながら向ったという元奴隷証言はこのことを端的に示している。Rawick, vol. 5, pt. 3, *Tex.*, 214-215. 注26も参照。"Negro Co-operation," *New York Times*, August 17, 1873; Edward Magdol, *A Right to the Land: Essays on the Freedmen's Community* (Westport: Greenwood Press, 1977), 174-176; Willie Lee Rose, *Rehearsal for Reconstruction: The Port Royal Experiment* (New York: Vintage Books, 1964), 315.
- 46) "Mulberry Tree Cut," Plantation Records, 1860-1911, Charles and Company, SCL. トウモロコシの類例としては、Aventine Plantation Diary, January 13, 1857-April 1, 1860 (Microfilm), MAH.
- 47) 当時、綿花を収穫する場合、それがプランテーション綿である場合には勿論のこと、「耕作地」綿であっても奴隷主が奴隷個人々の摘み取り量を記載するのが一般的であった。前者は労働報奨制との関係で、後者は個人々の綿花売却との関連でそうするのが習慣であった。サウス・カロライナ州の綿花プランター、ウィリアム・ロー (William Law) などは、1840年代後半から60年代初めまでの「ニグロ綿」(Negroes Cotton/ Cotton made by Negroes)の個人別摘み取り高を何冊もの『綿花台帳』(Cotton Book)に毎年記録した。Cotton Books for years 1854, 1855, 1856, 1857,

- 1858, 1859, 1860, 1861, William Law Papers, DUKE.この他、以下のものも参照。Caleb Coker Plantation Book, 1856-1861, SCL; John Campbell, "As 'A Kind of Freeman?': Slaves' Market-Related Activities in the South Carolina Upcountry, 1800-1860," in *The Slaves' Economy: Independent Production by Slaves in the Americas*, edited by Ira Berlin and Philip D. Morgan (London: Frank Cass & Co. Ltd, 1991), 131-169.
- 48) Stephen Norfleet Account Book, 1844-1895, November, 1845, Norfleet Family Papers, SHC; Stephen Norfleet Account Book, 1852-1873, December 1856, 1858, Norfleet Family Papers, SHC. この他、Stephen Norfleet Account Book, 1844-1895, December 1848, 1849, 1850, SHC; Stephen Norfleet Account Book, 1852-1873, November 1855, December 1859, SHC も参照。トウモロコシ収穫後の畑で家畜用飼料としてその外皮、茎等を拾い集める作業は、当時のプランテーションに見られる一般的光景であった。他にも例えば、ミシシッピ州の綿花プランター、トマス・シールドズ (Thomas R. Shields) は、集団/共同「耕作地」の「黒ん坊畑」(Nigger Patch) で従事していた40名前後のこうした集団共同作業についてプランテーション日記に「働き手[奴隷]たちのトウモロコシ畑で飼料の穫り入れ」(pull[ing] fodder in the peoples Corn patch) と記している。Aventine Plantation Diary, 1857-1860 (Microfilm), August 28, 29, 1857, MAH.
- 49) 「ニグロ・トウモロコシ」(Negroes Corn) が個人単位で収穫、換金化された例として、Killona Plantation Journals 1836-1844, 2 volumes, volume 1, MAH; "An Acct. of Negroes Corn and Fodder, 1863" William Law Papers, DUKE.
- 50) Plantation Journal, 1856-1857, April 12, May 5, 1856, Norfleet Family Papers, SHC; Plantation Journal, 1858-1859, July 31, 1858, Norfleet Family Papers, SHC. ノーフリートは奴隷たちに土曜の午後「彼ら自身の作物の作付けのために」休暇を与えたが、時には平日の午前中に「ニグロ作物」(the Negroes Crop) 用の労働時間を与えたりした。Plantation Journal, 1858-1859, May 15, 1858, June 16, Norfleet Family Papers, SHC; Plantation Journal, 1860, May 26, 1860, Norfleet Family Papers, SHC.
- 51) こうした集団/共同「耕作地」労働に対するプランテーション耕地労働優位の傾向の中にありながらも、集団/共同「耕作地」に対して可能な限り公平な扱い—奴隷側から見れば有利な待遇—がなされた点も軽視してはならない。例えば、前述のように、コリンズ3世は集団/協同「耕作地」で小麦が収穫される際、奴隷たちに機械の使用を認めたのであった。また、収穫した小麦運搬用として荷車も貸し出している。Plantation Record, 1850-1853, June 19, 26, 1850, Josiah Collins Papers, NCAH. 次の日付の女奴隷労働の様子も参照。June 17, August 21, October 10, 30, 1850, Josiah Collins Papers, NCAH. Tsutomu Numaoka, "The Negro Patch Revisited: Another Look at Its Structure and Function in the Antebellum South," *Bulletin at Niigata Sangyo University* 16 (December, 1996), 45-67.
- 52) 例えば、ルイジアナ州のさとうきびプランター、ヴァルクール・エイム (Valcour Aime) の日誌を見ると、1837年10月18日水曜日、「正午までに」プランテーション用トウモロコシの収穫を終え、「午後、プランテーション奴隷たちのトウモロコシ収穫作業開始」とある。更に1841年10月8日金曜日にはプランテーション用トウモロコシ、エンドウ豆の収穫後、「奴隷たちのトウモロコシ収穫作業を開始、彼らのトウモロコシ収穫量は2エーカー当り76バレル、総計3,000バレル」と記されている。1838年時点では奴隷のトウモロコシ収穫は主人のそれより遅れることわずか4日であったが、徐々にその差は広がり、1848年には29日、1851年には31日遅れとなった。差異は日数差だけでなく、質的差異となって表われた。1840年9月にはエイムのトウモロコシ収穫後雨が降り出し、1週間後に始まった奴隷たちの収穫も再度の降雨で作業を中断せざるを得なかった。1842年10月の日誌にも、奴隷たちの収穫作業中に「強い北西の風が到来、天候が悪化し、寒くなった」とある。自然条件の変化に注意しながらエイムが自身のトウモロコシの収穫に最適な数日を作業日程に組み入れた結果、奴隷たちの集団/共同「耕作地」における収穫作業は不利、不安定な条件下に置かれたのであった。Valcour Aime, *Plantation Diary*, 53, 77.
- 53) *Southern Quarterly Review*, new series 5 (1852), 219.
- 54) 作付け、収穫作業を例として挙げれば、Plantation Journal, 1856-1857, November 22, 1856, Norfleet Family Papers, SHC; Plantation Journal, 1858-1859, May 15, 1858, Norfleet Family Papers, SHC; Plantation Journal, 1860, May 26, 1860, Norfleet Family Papers, SHC; Journal of Araby Plantation, December 2, 1843, March 18, 1844, DUKE; Valcour Aime, *Plantation Diary*, October 15, 1842, October 15, 1843, September 30, 1848, September 29, 30, 1849, October 5, 6, 1850, October 6, 1855; James Allen Plantation Book, November 9, 1861, March 1, 27, November 9, 1862, March 14, 1863.
- 55) Breeden, *Advice Among Masters*, 14, 274-275 (傍点引用者)。
- 56) Nehemiah Adams, *South-Side View of Slavery; or Three Months at the South in 1854* (Boston: T. R. Marvin and B. B. Mussey & Co., 1854), 35. この方式と類似してはいるが、根本的に異なる次のような労働刺激策と混同しないよう注

意する必要がある。すなわち、奴隷主の中には集団/共同「耕作地」を割り当てずにプランテーション作物収穫量をもとに、その内の一定割合を奴隷たちに与える者もいた。これは「利潤分配法」(profit sharing)あるいは「作物刈り分け法」(crop sharing)と呼ばれ、元々奴隷主が時折奴隷監督(overseer)に労働意欲・刺激を与える方法として導入されたものであった。労働意欲・刺激を与えるという意味では「耕作地」政策と同様であるが、奴隷たちに「耕作地」を付与した訳ではなかった。“A Proclamation by William Jemison in 1827 to His Black People,” Robert Jemison, Jr. Papers, HSC; Register 1801-1812, Guignard Family Papers, SCL; Olmsted, *Seaboard Slave States*, 660; Ulrich B. Phillips, *American Negro Slavery: A Survey of the Supply, Employment and Control of Negro Labor as Determined by the Plantation Regime* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1969, c. 1918), 279.

57) *The Knickerbocker* 57 (June, 1861), 622-624.

58) Moore, *History of Alabama*, 363.

59) 拙論「アンティベラム南部奴隷制下における奴隷耕作地再考 (1)」『新潟産業大学経済学部紀要』19号(1998年), 77-80.

60) Account Book with the Negroes, 1817-1823, Pettigrew Papers, NCAH; Account Book with the Negroes, 1824-1830, Pettigrew Papers, NCAH; Slave Accounts, 1831-1837, Pettigrew Family Papers, SHC; Accounts with Slaves, 1848-1853, Pettigrew Family Papers, SHC.

61) 前注60参照。

62) George W. Spruill to Josiah Collins III, May 1, 1863, Josiah Collins Papers, NCAH; B. B. Ainsley to Josiah Collins III, May 4, 1863, Josiah Collins Papers, NCAH; Tsutomu Numaoka, “Josiah Collins III, A Successful Corn Planter: A Look at His Plantation Management Techniques,” *The Japanese Journal of American Studies* 9 (June, 1998), 105.

63) Phillips and Glunt, eds., *Florida Plantation Records*, 437. ジョーンズのプランテーションに存在した集団/共同「耕作地」に関しては、同書 “Chemonie Journal, January 1-August 13, 1856,” 339-509のほか、*Ibid.*, 48, 511, 523-525, 537, 547, 549.

## 第1表 集団/共同「耕作地」における奴隷労働

A) エラビ・プランテーション (ルイジアナ州)

日付

労働内容

1843年

2/11 Saturday "Clear and pleasant today - much water standing the fields and in the swamp. Ploughing in negro field - cutting cain[cane] and chopping & deadening trees - hauling timbers & wood to brick kiln - Ginning Cotton."

1844年

2/16 Thursday "Some colder than yesterday - Very ? - Same number of ploughs[eleven ploughs] running as yesterday and same Harrows[4 harrows] finished ploughing the last year's corn ground and commenced on the cotton ground - Frederick's force cleaning up negro field ready for the ploughs. Charles & Joshua with Mr. Henderson repairing the old wag[g]on & Frank in the Blacksmith's shop....."

2/21 Tuesday "Misting rain this morning - Mr. Henderson still ? - Frederick's force repairing fence - 15 ploughs in negro field - Ground ploughs very badly - Teams after Halling [Hauling] some poles for water - Gap & bridge went to halling[hauling] out sled - We have but little....."

2/22 Wednesday "Clear & warm - 13 ploughs running finished negro field and commenced in Brickyard field. - Fred force cleaning up before the ploughs. Henry Druggs ditching with 13 women - Bill with ten men chop[p]ing and rolling logs in negro field - Kennida & Frederick went to Carthage for Mr. Nutt did not come up - Mr. Henderson with Josh & Charles....."

3/14 Tuesday "Hazy & warm - 16 ploughs running commenced breaking out middles and ploughing up New ground in negro field - Frederick with men & women in the Burn[field] - Kennida & Yellow Henry after ? got 2 Loads - Charles & Josh[ua] with Mr. Henderson Frank with Mr. Reid....."

3/15 Wednesday "Cool and quite cloudy - Commenced planting cotton in Levee field..... 18 hands ditching - Charles & Josh with Mr. Henderson - Frank with Mr. Reid - Frederick with the balance of the men but the ploughmen - 10 ploughs running breaking muddles in negro field - chop[p]ing and rolling logs in the [B]urn[field] - women set [t]ing out Burmuda grass....."

3/16 Thursday "Cold & Cloudy a few drop of rain - same company planting cotton that rows at it yesterday until 12 o'clock when they went to ? - 8 ploughs running before dinner & 12 after dinner commenced ginning Mr. Jordan's cotton this morning - Frederick with the men making bridges - Women planting Bermuda grass in the forenoon and picking up brush in the afternoon in the negro field - 18 hands ditching - Charles & Joshua with Mr. Henderson - Frank with Mr. Reid....."

3/18 Saturday "White frost this morning - Clear & windy all day - 4 planters planting cotton in negro field - 11 ploughs before dinner & 12 after quit the Levee field and went into the Big field after dinner - Frederick's force replanting corn - 6 men rolling logs & ditching - Kennida & Phil making hoe handles - Frank in Bl[ac]ksmith Shop - Charles & Josh with Mr. Henderson....."

3/19 Sunday "Much warmer than yesterday - 4 planters planting finished negro field about 10 o'clock and commenced in New ground - 13 ploughs commenced ploughing in the Burn - Frederick's force cleaning up before the ploughs - Frank with William in Bl[ac]ksmith shop - Charles & Josh & Kennida with Mr. Henderson....."



1846年

- 2/24 Tuesday "Has been great deal of rain since last date – so much that not much ? been done – Have negro field burn – & Haries field yet to ridge up – & also new ground to plough."
- 4/15 Wednesday ".....Our corn looks remarkably fine – and now beginning to grow – pumpkins coming up well, but our cotton is distressing, has been planted, some four weeks & some 3 weeks, and none up yet to a stand – we have waited from day to day to decide what to do, and yet in a bad quandary about it – some has come up & been killed – some up with 3 ? and some just coming up in one earliest planting – a great deal sprouted under ground & ground so heavy & wet can't come up & now farming a crust – our oldest cotton ground has a good deal of trash upon it, and after riding over it all this evening with Mr. Grubbs have concluded to put the hoes in it tomorrow, go over it, take trash off, cut out grass, trim it some & replant, & possibly we may be able to get a tolerable stand if it does not die – This is the Burn field, about 50 acres – then comes about 50 acres of new ground – planted some time on the 16th March – That has still less up upon it – & a good deal sprouted under ground, but doing and that up looks much wilted – so conclude to plough this up & plant ours tomorrow – will run harrows ours first, open it, put in seed that rolled in water & dirt, & corn as well as we can – it may come up – Then comes next planting of negro field, about 120 acres, a good deal of this is tolerable altho' theirs – & a good deal just coming up – think that will do to get a tolerable stand if it does not die – Then comes the Big field, all of which is coming up, & we cannot decide upon it to day.....Learn? 10 Harrows running ? corn. & balance of hands scraping cotton in negro field. Shearing sheep."

出典： Journal of Araby Plantation, 1843-1850, Rare Book, Manuscript, and Special Collections Library, Duke University, Durham より作成.

注： 本文中、判読不能な箇所には「?」を、省略箇所には「.....」を付けた。

B) ジョサイア・コリンズ・プランテーション (ノース・カロライナ州)

日付

労働内容

1850年

- 1/14 Monday "Men still at Western cutting logs 15 Women cutting Reeds & Briers—Rest of Women with Children picking up Chunks in Negro Patch & 83 acre 2 Carts hauling wood—2 Men went around Lake Gate Canal taking out Chunks—2 hands burning coal"
- 6/19 Wednesday "9 Ploughs in Lower Rice field till 8 oclock—2 Machines Cutting Wheat in Negro Patch till 12 oclock 1 balance of day—binders as before 16 craders till 8 oclock—balance of hands picking cheat from wheat till 8 oclock—rest of day binding hauling & stowing in Machine house"
- 6/20 Thursday "Same Plough work as yesterday—Balance of hands cutting, shucking tying hauling & stowing wheat from 74 acre Negro Patch & Adam Cut Harvest still"
- 6/26 Wednesday "6 Waggons hauling wheat from Negro Patch—Machine & balance of hands in 83 acre & Indian Town field Harvest"
- 7/ 6 Saturday "13 Ploughs in Gallows field—8 waggons hauling wheat from Indian Town Part of hands Thrashing & part raking wheat in Negro Patch"
- 7/ 8 Monday "14 ploughs in Gallows field—3 waggons hauling wheat from Barn to Machine House"

		—Part of hands Thrashing—Part raking wheat in Negro Patch—Balance setting up corn in Gallows & Billet fields”
7/ 9	Tuesday	“4 Ploughs in Potatoe Patch 10 Hands hilling potatoes—Balance <u>Thrashing</u> & raking wheat in Negro Patch”
8/23	Friday	“Women cleaning 3ft ditches in Adam Cut & Negro Patch, Men Cutting 3ft ditches in Billet field”
11/21	Thursday	“All hands carrying corn from Barn & shelling till 10 oclock—Balance of day 24 hands cleaning out tap ditches in Negro Patch, Adam Cut & North Boundary—5 Men hauling straw from Barn—Women loading & unloading waggons”
12/16	Monday	“2 ploughs in Negro Patch—Balance of men with women cleaning Hogs— stopped by rain—Balance of day shucked corn & put hogs in pens”
12/17	Tuesday	“4 ploughs in Negro Patch—2 in 83 acre—Balance of men cutting & salting pork—Women gleaning corn at Western”
12/18	Wednesday	“9 Ploughs in Negro Patch—2 do in 83 acre—Balance of Men Cutting Wood—Women gleaning corn at Western—5 hands frying fat”
12/19	Thursday	“Same ploughs as yesterday—Balance of Men with part of Women cutting hauling & bringing up wood Balance of women cleaning stable yard cleaning furrows in Negro Patch and frying fat”
12/20	Friday	“11 Ploughs in Negro Patch—Balance of Men with part of women getting wood—Balance of women fixing corn in Barn”
12/23	Monday	“9 Ploughs in Negro Patch & 83 acre Balance of Men at Western cutting logs Women cleaning out tap ditches in field C Burning grass & pulling up stalks in field F”
1851年		
4/ 9	Wednesday	“11 Ploughs & hands planting Corn in field H—2 Markers in Negro Patch”
4/11	Friday	“Planting Corn in N boundary & Negro Patch & making Brush Bar”
4/12	Saturday	“9 Ploughs & 8 Harrows in Negro Patch & 83 Acre—balance of hands planting corn in same & in field G”
4/16	Wednesday	“3 ploughs & hands planting corn in field G—1 plough in Negro Patch 8 in N Boundary 5 part of day in Indian Town field”
4/22	Tuesday	“7 Ploughs in Indian Town 2 in 83 acre 1 in Negro Patch—6 Men Making boards balance of hands hauling brush & straw 5 boys getting logs for Saw Mill”
4/30	Wednesday	“Same Work with 1 Plough in Negro Patch—3 Men hauling logs & 6 Men Cleaning 3 ft ditches in field B at Western”
5/ 7	Wednesday	“5 Ploughs in Indian Town 3 in N Boundary, 6 in field F 1 in Negro Patch—Balance of hands Weeding Corn in Negro Patch & Adam Cut”
5/10	Saturday	“10 Ploughs in G & H—4 in 83 acre & Adam Cut—1 in Negro Patch Balance of hands weeding corn in F—stopped at 12 o'clock”
5/14	Wednesday	“6 Ploughs in B—3 in G—3 in Indian Town 4 in Negro Patch 8 hands on the Spruill road—in B Balance weeding corn in G & thinning”
5/15	Thursday	“4 ploughs in Indian Town 1 do in Negro Patch—Same hands on Spruill Road—balance thinning & replanting Corn”
5/16	Friday	“4 Ploughs in Adam Cut & N Boundary 1 in Negro Patch—5 in B & C—3 in G—balance of hands weeding Corn in G”
5/19	Monday	“9 Ploughs in fields E & F—4 do in Adam Cut & 83 acre—1 do in Negro Patch—Balance of hands thinning corn in fields B & C”
5/20	Tuesday	“4 Ploughs in 83 acre & Lake Side 1 do in Negro Patch—9 do in fields D & E—

		Balance of hands thinning corn in fields D, E & F"
5/21	Wednesday	"12 Ploughs in Lake Side & 74 acre till 12 o'clock—then 6 of them moved to field E—1 do in Negro Patch—3 Harrows in Indian Town—Balance of hands replanting corn in 83 acre, Negro Patch Adam Cut & N. Boundary"
5/22	Thursday	"6 Ploughs in 74 acre & Lake Side 1 in Negro Patch—6 in fields D & F Balance thinning in fields D, G & H"
5/23	Friday	"6 Ploughs in Lake Side—1 do in Negro Patch—9 do in fields B & C Balance thinning Corn in G & hoeing on Lake Side"
5/24	Saturday	"6 Ploughs in 74 acre—1 do in Negro Patch—9 Men cleaning out Saw Mill Balance thinning corn in Negro Patch & hoeing in Adam Cut—All hands stopped at 12 except ploughs in 74 acre"
5/26	Monday	"9 Ploughs in field B—6 do in 74 acre & Lake Side—1 in Negro Patch—4 women cleaning N B ditch—Balance hoeing in Lake Side, 74 acre & field B"
5/27	Tuesday	"9 Ploughs in field C—6 in Lake Side—1 in Negro Patch—Balance of hands hoeing corn in 74 acre & 83 acre"
5/28	Wednesday	"9 Ploughs in field D—6 do in 74 acre—1 in Negro Patch—Balance thinning & hoeing in Negro Patch & Boundary"
5/29	Thursday	"15 Ploughs in N Boundary—Adam Cut & 83 acre—Balance of hands thinning corn in N Boundary Adam Cut & Negro Patch"
5/30	Friday	"9 Ploughs in field E—6 do in 74 acre—1 do in Negro Patch—Balance thinning & replanting in 83 acre stopped by rain from 12 till 4 oclock Balance of day 15 ploughs in 83 acre"
5/31	Saturday	"15 Ploughs in fields E & G—1 do in Negro Patch & 83 acre Balance hoeing corn in field E All stopped at 12 o'clock"
7/ 1	Tuesday	"15 Ploughs in field F—Adam Cut & Negro Patch—Balance of hands killing Chinz Bug"
7/11	Friday	"All hands laying by Corn in Negro Patch & 83 acre"
11/24	Monday	"Same work [Gathering & hauling corn] from 83 acre & Negro Patch"
1852年		
2/10	Tuesday	"12 Ploughs in Negro Patch—children & part of women farming corn & pulling up stalks—rest of hands grubbing in field below Indian Town"
2/12	Thursday	"11 ploughs in Negro Patch 2 in Adam Cut—Balance of hands hauling & spreading manure"
3/31	Wednesday	"9 Ploughs & 6 Markers in fields G & H—Men cutting 3 ft ditches in Negro Patch—Women levelling ditch bank of Lake Gate Canal & cutting reeds in field H"
4/ 5	Monday	"Harrowing & planting corn—digging 3 ft ditches in Negro Patch & Burning log heaps in Tuscarora"
4/ 6	Tuesday	"Same work as yesterday"
12/10	Friday	"Bringing up wood & digging ditch in Negro Patch"

出典：Plantation Record 1850 to 1853, Josiah Collins Papers, North Carolina Division of Archives and History, Raleigh より作成。

注：表中下線は原文通り。

第2表 E.ベティグラーによる対奴隷トウモロコシ代金支払

A)

(単位:ドル)

奴隷名(出生年)\年次	1819年	1820年	1821年	1822年	1823年
Charles (1769)	4. 71	0. 80	4. 00	5. 25	6. 60
Ben (1778)	4. 71	2. 40	4. 00	9. 10	6. 60
Will (1780)	4. 71	5. 00	4. 00	9. 10	6. 60
Harry (1782)	4. 71	2. 20	4. 00	2. 80	6. 60
Pompey (1778)	4. 71				
Jacob (1796)	4. 71	2. 30	4. 00	4. 50	6. 60
James (1796)	4. 71	3. 60	4. 00	5. 70	6. 60
David (1798)	4. 71	3. 60	4. 00	4. 20	6. 60
Jeffry (1798)	4. 71	2. 40	4. 00	4. 55	6. 60
Sam (1800)	4. 71				
Demps (1802)			4. 00	2. 62	6. 60
Moris (1800)	4. 71	2. 40	4. 00	2. 62	6. 60
Nelson (1802)	4. 71	2. 00	4. 00	5. 40	6. 60
Sarah (1813)	3. 00				
Josse			4. 00	2. 62	
Amelia	3. 00				
John (1802)			4. 00	4. 90	6. 60
Aron (1782)	3. 00	2. 00			
Airy (1780)	3. 00	2. 00			
Adam			4. 00	4. 20	6. 60
Rachel (1800)	3. 00				
Penelope (1805)	3. 00				

出典: Account Book with the Negroes, 1817-1823, Pettigrew Papers, North Carolina Division of Archives and History, Raleighより作成.

注: 1. 表中空欄は原本に記載がないことを示す。

2. 表中の年次は代金支払い年を表す。実際の作物収穫年はその前年となる。

## E.ペティグルーによる対奴隷トウモロコシ代金支払

B)

(単位:ドル)

奴隷名(出生年)\年次	1825年	1826年	1827年	1828年	1829年	1830年
Charles (1769)	3.45	10.0	4.20	1.59	4.68	4.68
Ben (1778)	1.80	6.40	4.20	1.65	3.42	3.42
Will (1780)	2.70	8.80	4.20	1.50	5.96	5.96
Harry (1782)	2.40	5.20	4.20	1.65	4.14	4.14
James (1796)	2.85	7.60	4.20	1.50	3.60	3.60
Jacob (1796)	2.70	4.00	4.20	1.95	3.60	3.60
Jeffry (1798)	2.70	6.40	4.20	1.95		
Moris (1800)	2.70	6.00	4.20	1.80	5.94	
Sam (1800)	2.25	6.40	4.20	2.40	5.40	5.40
Nelson (1802)	1.80	7.20	4.20	1.65	5.40	5.40
Demps (1802)	1.65		4.20	2.25	5.94	5.94
Pompey (1788)	2.55	6.80	4.20	2.25	3.78	3.76
John (1802)	2.70	6.80	4.20	2.10	6.48	6.48
Adam	2.25					
Henry (1806)		2.80	2.10	1.87	3.60	3.60
Merrick	2.25					
Jerry (1807)		2.80	2.10	1.50		
Mack (1807)		2.00	2.10	1.87	3.60	3.60
Hanter					2.70	2.70
Peter (1823)					2.16	2.16
David (1798)		8.00	4.20	2.25	3.78	3.78
Airy (1780)	3.00			1.87	3.24	3.24

出典: Account Book with the Negroes, 1824-1830, Pettigrew Papers, North Carolina Division of Archives and History, Raleighより作成.

注: 1. 表中空欄は原本に記載がないことを示す。

2. 表中の年次は代金支払い年を表す。実際の作物収穫年はその前年となる。

## E.ペティグルーによる対奴隷トウモロコシ代金支払

C)

(単位:ドル/b. = bushel)

奴隷名(出生年)\年次	1833年	1834年	1835年	1836年	1837年	1838年
Charles (1769)	3.85	5b.	5b.	7b.		
Bill (1778)	2.75		5b.	5b.		15b.
Ben (1778)	3.85	6 1/2b.	5b.	5b.		20b.
Harry (1782)	2.75	5b.	5b.	5b.		7 1/2b.
Pompey (1778)	2.75	3 1/2b.	5b.	5b.		8b.
Moses (1800)	4.40	10b.	5b.	5b.		10b.
John (1802)	5.50	6 1/2b.	5b.	5b.		5b.
Jeff (1796)	5.50	6 1/2b.	5b.	5b.		5b.
Sam (1800)	5.50	6 1/2b.	5b.	5b.		15b.
Jerry (1807)	4.40	4b.	5b.	5b.		5b.
Henry (1806)	4.40	5b.	5b.	5b.		15b.
Demps (1802)	1.27	9b.	5b.			
Jacob (1800)	4.40	8b.	5b.	5b.		5b.
Jim (1802)	4.40	7 1/2b.	5b.			
David (1798)	4.40	7 1/2b.	5b.	5b.		8b.
Britton (1811)	4.40	5b.	5b.	5b.		8b.
Mack (1807)	4.40	5b.	5b.	5b.		2 1/2b.
Allen (1812)	4.40	5b.	5b.	5b.		5b.
Cambridge (1811)	1.10	5b.	5b.			
Alfred (1812)	4.40	4b.	5b.	5b.		5b.
Holloway (1811)	9.35	12 1/2b.	5b.	5b.		2 1/2b.
Gabe (1800)			1b.			2 1/2b.
Airy (1805)						
Stephen (1814)	1.65					
Frank D. (1817)	1.10	2b.				
Nelson (1802)	4.40	7b.	5b.	5b.		8b.
Arther	2.75	8b.	5b.	5b.	5b.	2 1/2b.
Virgil (1814)	1.10	2b.	5b.	5b.		1 1/2b.
Jack (1817)						
Hanson (1815)	1.10	2b.	2b.	2b.	2b.	8b.
Welcome (1818)	1.10	1b.				
Macey	1.10	2b.				
Joe	1.10	1b.				
Tom (1812)	1.92		5b.			
Fred			2.75b.	5b.	5b.	5b.
Isaac	0.82	1 2/2b.				
Simon		7.70	5b.	5b.	5b.	
Edmond						2 1/2b.
Dick (1824)		0.55				
Frank B. (1821)		0.55				
Isham (1820)		0.55				
Prince (1807)			1b.			2 1/2b.

出典: Slave Accounts, 1831-1837, Folder 482, Pettigrew Family Papers #592, Southern Historical Collection, Wilson Library, University of North Carolina at Chapel Hillより作成.

注: 1. 表中空欄は原本に記載がないことを示す.

2. 表中の年次は代金支払い年を表す. 実際の作物収穫年はその前年となる.

第3表 W. ペティグルーによる対奴隷トウモロコシ代金支払

(単位:ドル)

奴隷名(出生年)\年次	1850年	1851年	1852年	1853年
Harry (1782)	2. 662/3	3. 95	1. 25	
James (1796)	5. 331/3	3. 95	1. 25	
Jacob (1796)	5. 331/3	3. 95	3. 75	4. 5
Henry (1806)	4. 662/3	9. 48	3. 75	4. 5
Jerry (1807)	6. 662/3	7. 90	3. 75	
Prince (1807)	6. 662/3	3. 95	1. 25	
Allen (1812)	7. 331/3	6. 32	3. 75	4. 5
Hanson (1815)	3. 331/3	3. 95	1. 25	4. 5
Frank B. (1821)		3. 95		
Frank D. (1817)	4. 662/3	3. 95	2. 50	4. 5
Major (1825)	3. 331/3	5. 53	1. 25	4. 5
Dimer (1826)	6. 662/3	3. 95	1. 25	4. 5
Thomas (1829)	3. 331/3	3. 551/2		
Jack (1817)		5. 53	1. 25	4. 5
Nelson (1802)	3. 331/3	6. 32	2. 50	4. 5
Clarissa (1827)		2. 37		
Lucy (1833)		2. 37		
Airy (1780)			1. 25	
Aaron (1819)			1. 25	4. 5
Wilson (1833)				1. 0

出典: Accounts with Slaves, 1848-1853, Folder 487, Pettigrew FamilyPapers, #592, Southern Historical Collection, Wilson Library, University of North Carolina at Chapel Hillより作成.

注: 1. 表中空欄は原本に記載がないことを示す。

2. 表中の年次は代金支払い年を表す。実際の作物収穫年はその前年となる。

# The Collective/Common Field for Slaves' Own Use Revealed

Tsutomu NUMAOKA

2009年3月

新潟産業大学経済学部紀要 第36号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY  
FACULTY OF ECONOMICS

No. 36 March 2009